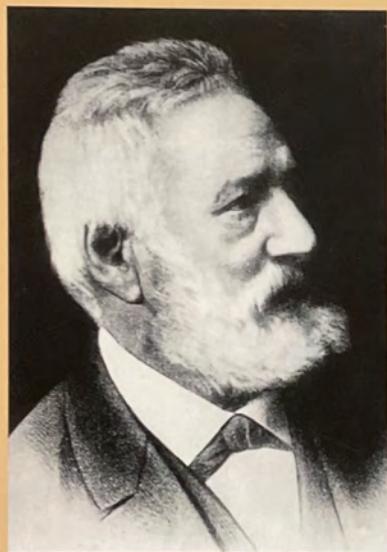


ユニテ

29



財団法人 ロマン・ロラン研究所

2002. 4

音楽評

白石 知雄

ロマン・ロラン研究所の設立三十周年を記念して、神谷郁代によるオール・ベートーベンのピアノ・リサイタルII写真IIが開かれた。

曲目は前半がト短調のソナチネと「熱情」ソナタ、後半がホ長調のソナタ作品一〇九とハ短調のソナタ作品一一一。全体を通して、真摯にベートーベンを弾く「神谷郁代 ベートーベンを弾く」



にせき立てられ、分散和音の波に飲み込まれる過程は、テンポの極端な緩急で全体の構成感をあいまいにした反面、とても分かりやすく感情の動きを表現していた。だがこれらは、いわばベートーベン演奏の常とう手段とも言えるかもしれない。

今回、個人的には後半二作品でのめい想的な表現が印象深かった。

強い意志感じる演奏

ト短調のソナチネと「熱情」ソナタ、後半がホ長調のソナタ作品一〇九とハ短調のソナタ作品一一一。全体を通して、真摯にベートーベンを弾く「神谷郁代 ベートーベンを弾く」

で意欲が空回りした印象もあったが、ホ長調ソナタのスケルツォやハ短調ソナタの冒頭

さえた調子で歌い上げる息づかい。ハ短調ソナタの終楽章で、微細な裝飾音が続く時の独特の緊張。こうした瞬間はなかなか貴重なものだったのではないだろうか。||6月23日、京都コンサートホール。

神谷のベートーベンは野太い音で歌い、両足で大地に踏み張るように低音を打ち鳴らすので、どうしてもがっしりした体格の男性の姿を連想してしまう。「熱情」ソナタでは、ペダルの響きが飽和気味

(音楽評論家)

財団法人ロマン・ロラン研究所設立30周年記念演奏会の記事

ロマン・ロラン研究所と自然破壊	3	宮本エイ子	48
ロマン・ロラン研究所の活動・設立趣意書
二〇〇一年度 賛助会員、寄付者名簿	53
あとがき	小尾俊人	58
Romain Rolland et Victor Hugo	Didier Chiche	1
— un point de vue français —			

ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー

— フランス人の目から見る —

ディディエ・シュシュ

シッシェ 由紀子 訳

序 文

ロマン・ロランの作品は奇妙な運命を辿ったと言える。一九一五年にノーベル賞を受賞し、世界的な絶賛を浴び、各国語に翻訳されロシアなどでは何百万部も売り上げる。フランスでも大衆の絶大な支持を得る（『ジャン・クリストフ』はもちろん『コラ・ブルニョン』や『魅せられたる魂』は当時のベストセラーとなる）。ところが、その後だんだんとロラン離れが進み、今日に至っては書店に並ぶ作品は稀である。ロランの言葉は彼が関心を寄せた作品や歴史的事件に関する書物の中で引用されるのみで、それ自体が読まれることは少ない。

ロラン離れは一九四〇年から五〇年にかけておきる。まずインテリと呼ばれる人々が彼の文章がうまくないと、批判し始めるが、これだけではロラン離れの十分な説明とは言えぬ。私が講演のタイトルを「ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー」にしたのも、この二人を比べることで、（ロランもこの比較を否定はしないであろう）なんらかの答えを見出せると、思うからである。

ロランが人間ユゴーと、その作品も高く評価していたことはよく知られる。スイスで若きロランの目に映った老作家は預言者のようであり、「ユゴー万歳！」と叫ぶ群集に沈黙を課した後で「共和国万歳！」と叫ぶのであった。また生計を立てるためにロランが教えていた、退屈で偽善的な教会の説く公けの道徳の授業で、ユゴーの「ああ無情」を読むときだけ生徒達が生き生きしていたと、語っている。

若きロランだけでなく、十九世紀の終わりに作家であろうとする者にとってユゴーは父であり、多様な着想と豊かな作品で十九世紀を総括する人であった。更に、ユゴーは共和国の価値を象徴していた。一八八五年の彼の葬儀はそういった意味で市民の宗教的儀式でありフランスという共和国の詩人への崇拜の儀式の様を呈していた。

作家であろうとするならば、必然的にユゴーを軸に自分を位置付け、彼の作品をとおして十九世紀の遺産を受け継ぐことであった。

ロマン・ロランと十九世紀

ロランがユゴロ的であるのは、彼が十九世紀に生まれたからだけでなく、彼のイデオロギーが十九世紀を継承しているからである。十九世紀の革新派のインテリには特有の考え方、信条があり、ロランもこれに追随している。ユゴロの作品はそれらを雄弁に物語っているが、簡単に挙げると以下のようになる。

- ・革新派のインテリという立場をとる
- ・民衆を信頼し、輝く未来を作り上げると信じる
- ・普遍的共和国の到来を信じる
- ・反聖職主義であると同時に唯物論の席卷を嘆く

・ドイツを敵国ではなく共にヨーロッパの礎石となるべき隣国だとし、憧憬する

二人の革新派作家

ロランもユゴーも共にインテリであり革新派に属する。この二つの言葉は重要である。

まず、インテリとは、少なくともフランス語においては、自分に関係ないことに関心を寄せ、係わって行く人達である。芸術家であろうと作家であろうと自分の世界に閉じこもらず、自分の考えを主張することを恐れず、何らかの大義を擁護し、不正を暴く。たとえそれが自分の所屬する世界に反する場合でも。ユゴーは貴族院議員でありながら七月王政の重庄と偽善を批判した。ロランも若くして生まれ育ったカトリック教と袂を分かたつ。

インテリとはヴァレリーがゲーテのファウストを引用して言うように「常に否定する精神」である。否定する精神は育つた環境を批判するだけでなく同志の行き過ぎをも弾劾する。ユゴーは革新派共和派の唯物論をはっきり否定し、一八四八年の革命時には黎明期にあつた社会主義が神のいない恐ろしい宗教になる危険性を孕んでいることに警鐘をならしている。若きロランもドレフュス事件の際には当然ドレフュス擁護派に身を置くが、この高貴な大義を出世に利用しようとする人々を強く批難する。ロランの旧友であり、同士であつたシャルル・ペギーによれば「彼等は伝説を政治にかえてしまふのだ。」後にソ連共産党革命に希望を見出したロランであるが、一九二七年にE・レニエに当てて「共産主義に対する考えは変わっていないが、この高邁な思想が偏狭なセクト主義と愚な硬直性と暴力の信仰により台無しにされ、共産主義を反転させたファシズムを生んだ」と、嘆いている。主義主張にコミットしても、超越した倫理を希求し、常に別の場所にいる。ユゴーに「私は他のことを考えている人間だ」という名句がある。コミットすれどもそれに利用されることを拒否し、戦いながらも自分自身の精神の独立は保つのがインテリだった。

ロランもユゴーもそのコミットした中味は似ている。二人とも明日は今日より美しいと考え、社会的政治的進歩、正義の国の到来を信じ、それを速めるためにあらゆる努力をするべきだと考えている。正義の国では階層は消滅し、真実と正義が普遍的に崇拜される（プロレタリア独裁というマルクス主義のドグマとは正反対のものである）。「真実と人間を尊重する限りプロレタリアを支持し、これらを侵害するならば反対する。人間的価値を前に特権階級など上にも下にも有り得ない。」（『ユマニテ』一九二二年三月十一日）

彼は主意主義を信じるが、批判精神を持つ。「クレランボー」の中で「結果は手段を正当化しない。進歩のためには結果よりもむしろ手段の方が重要である。」と書かれている。

この批判精神に基づくコミットメントからユゴーとロランのフランス革命の見方が似ていることが分かる。

ユゴーの革命を題材とした『九十三年』という小説があるが、これはロランの作品『フランス革命劇』だけでなくロシア革命に対する態度にも影響を与えている。

『九十三年』の中でフランス革命は部分的に評価したり批判したりするものではなく、まとめて受け入れるか否定するものとして描かれている。マラー、ダントン、ロベスピエール三人の激しいやり取りの中で、革命の遂行を危うくしかねない危機をめぐる意見の対立を超えて三者の補完性が浮き上がる。マラーは言う「我々三人が革命そのものだ。我々はケルベロスの三つの頭なのだ。一つは話す。それが貴方だ、ロベスピエール。もう一つは吠える。それが貴方だ、ダントン。」ダントンはそれに続けて「もう一つは嘔み付く。それが貴方だ、マラーよ。」ロベスピエールがこれを受けて、「三つとも嘔み付くのだ。」革命は一つの塊であり受け入れるか拒否するかどちらかだ。この考え方は第三共和制の下で行き回り今日にも至っている。

ロランもこれを踏襲し、戯曲形式をとることで革命の多様性と統一性を描くことに成功している。恐怖政治を終わりにしたいダントンを「信じられないやつばかりだ。仮面を剥ぎとってやる。」と、周りの人間を皆疑っているロベ

スピエールに対峙させる。ダントンもロベスピエールも革命遂行のためには対立し合い、同時に補充し合って描かれていく。一九一九年一月にセーベルに宛てた手紙には「友よ、私がロシア革命を否定することはありません。その前に貴方がフランス革命を否定してごらん下さい。九月殺りく、ランバル夫人殺害、マリー・アントワネットの卑劣な判事達。貴方はそれらが国民公会の産物ではなくその理想とも無縁のものだと言うでしょうが。」とある。つまり、革命とは、フランスであろうとロシアであろうと、その犯罪に目を瞑らずに一貫して支持するのは困難なのだ。ユゴーも「ロベスピエールの独裁は憎むが能力は認めざるを得ない。彼の功績で旧い世界が倒されたことは確かなのだ。」と語る。戯曲形式は対話で進み結論がいらぬことから、ロランにとっても全体を評価はすれど盲目的ではないという姿勢をとるのに都合が良かった。このことはユゴーから継承したもので上に挙げた一節の様に、小説でありながら劇中の対話の形で進んで行く。

革命は作家にとってインスピレーションの宝庫である。歴史上のこの時代を華やかに描くのはユゴーと同様で、一八九二年に、『革命劇』の序文でロランは「特に革命伝説を利用せねば。これこそ国民の魂の根本でありそれ以前の史実など幾つかの例外を除いては重要ではない。」と言ひ、ユゴー同様にロランも小説ばかりではなく詩においても革命的叙事的な威力とこの時代の神話的魅力に敏感であった。この点において、ロランは、ダントンなどの革命の立て役者達を美化し国造り神話をつくらうとした第三共和制精神に準じている。ただ、叙事詩を書くことを課しながらも判断の自由は確保している。

唯物論への嘆き

革新派のインテリであっても唯物論者ではない。十九世紀のインテリ達の戦いはまず聖職者達、つまり教義で民衆

の精神を支配し社会を支配しようとするカトリック教会に向けられていた。教育、国家からの宗教分離のための戦いの中でロランの同志はドレフュス擁護者達だった。ロランは若くして信仰を失い親しんだカトリック教と縁を切る。一九二五年頃「内面の旅路」の中に「私がカトリック信者でなくなったことで母の心は血が滴るほど嘆いた。」とある。

だが、ロランは決して無神論の唯物主義者ではなかった。彼は常に精神性、超越性、漠然とした宗教的感情を希求していた。「私が生涯最初に力を注いだのが信仰を捨てることでした。それこそ最も宗教的な行いでした。神よ私は貴方に率直でいよう。もうミサには行かない。もう貴方を信じない。」神の答え「信じぬこともまた信仰である。我らが対立していなければ、そなたも我を否定はせぬだろう。」つまり、カトリック教という社会的に認知された宗教を捨てても、精神の営みを放棄した訳ではなく、同文の中でスピノザの汎神論に出会った際の驚きと歓喜を描写している。唯一の無限な存在、存在総ての存在、他には何もない存在という言葉に深く感動する。「全てに神がいるならば私にも神がいるのだ」

ロランが唯物論者でないことは明らかである。一九〇九年三月にルイズ・クリュピに宛てた手紙で現実的な常識の域を出ずに、精神性を認めない宗教分離主義の弱点を突いている。クローデルはロランの生涯の末期に親交を深めるが、この老人に宗教的魂を見て取る。一八九八年にはカトリックの友人がロランに「貴方とお話していると自分がクリスチャンであることが恥ずかしく思えます。貴方の方が私より余程クリスチャンの名にも使命にも値するからです。」と、書いている。

革新派の思想家であるが信じることを強く求めた点でロランはユゴーに似ている。ユゴーは生涯カトリック信者であったことはなく、洗礼さえ受けていない。「宗教は認めるが、あらゆる宗派は拒否する。」宗派とは信仰で社会秩序を司る勢力であり、ちょうど十九世紀に社会学的カトリック教という言葉が使われていたのはよい例である。(ユゴー

は政治の場では、カトリック党の天敵であったことはよく知られている。宗教は認めるとは、彼にとつては信じるという行為は人間の営みの本質に値することだったからだ。ユゴーは常に信仰を持ち、この世はある意味を持ち、我々はその魂の一部であつて、「全てが無限の中で誰かに何かを言っている」(「瞑想」と、確信していた。

「立ってはいるが神秘の方に傾いている」同文でユゴーが自らを描写した言葉はそのままロランにもあてはまるのではないか。

だからこそ両者とも近代文明の下で唯物主義が席卷するのを嘆いたのだ。一八四〇年に書かれ、後に選集に取り上げられた『地平線の両側』という題の詩で、ユゴーは一つの文明がもう一つの文明に道を譲る様子を苦々しくうたっている。

アメリカが台頭し、ローマは滅びるノ

神よ、貴方のローマがノ

おお神よノ 我々の道を消し去り、人の本質を歪めてしまうことにならぬか
人間の天分を移してしまえば

かくして物質が思想に取って替わるノ

イタリアは芸術、信仰、心、火

アメリカに魂はなく 労働者は冷たく

人間ばかりの世界

イタリアには神がいた

熱き星は沈み、冷めた星が昇る

神よ、フィラデルフィアの商人の街がいかにしてなれようか

ミケランジェロが夢を追ひ、イエスが十字架を置き、ホラテウスが歌った街に、

我は知る由もない 神よ、深き理性よ

人の魂が眠りに陥ることなく、この世の光に影がさすことなく

この月をこの太陽の代わりに与えようというのか？

長いがとても重要な詩である。これは反アメリカ主義を掲げたものではなく、アメリカは象徴にすぎない。ユゴーが文明の危機をいかに不安に感じていたかがよく分かるが、この文明の危機こそロランが認識していたことで、一九〇三年には『ベートーベンの生涯』の序文で「何の威信もない唯物主義」が「旧きヨーロッパ」を潰すと、書いている。ここからヨーロッパの再興という夢が現れ、ユゴーと同様に作品の中に根付いてゆく。

二人のヨーロッパ人作家

ロランがユゴーの様に統一ヨーロッパ支持者だったと述べるのは陳腐であるが、彼が切願したヨーロッパ再興とは精神のことである。唯物主義に沈む世界にあって、ヨーロッパこそ文化的精神力としての存在意義があり、物質主義に対抗して、アジアとも実り多き対話を進めて行くべきだというのだ。この意味で、ロランにとっても、ユゴーにとっても、統一ヨーロッパとは政治的大義ではなく文化的なもので、超国家ではなく知の空間を築こうとしていた。「知

と精神の祖国を築かなくてはならぬ。そこからヨーロッパの魂が生まれるだろう」(一九〇一年「親しいソフィア」)
ヨーロッパにおける戦争はどこが相手であつても内戦であり、「どこが勝とうが最初の必然的敗者は西洋なのだ」(一九一一年九月六日)精神の共通の祖国としてのヨーロッパは認知されていなくても既に現実であり、この偉大な思想が「戦いを超えて」に脈々と流れている。

文化の祖国としてのヨーロッパ、ヨーロッパという国籍こそユゴーの思想の最たるものである。「いまやヨーロッパという国籍がある。その昔アイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデスが(アテネという都市国家を超えて)ギリシャ文明圏に属していたように。詩人にとっては文明を共有する全ての地域が祖国である。アイスキュロスにとってはそれはギリシャ文明圏であり、ウエルギリスにとってはローマ文明圏であつた。我々の祖国それはヨーロッパである」(「ブルクグラープ」序文)ユゴーはこの統一ヨーロッパは世界合衆国の前身だと言ひ、ロランは一九二八年インドをテーマにした「ヴィヴェカーナンダ」の中で「人類の合衆国」という言葉を使つている。一九一六年アンドレ・ジッドは「日記」の中でロランがいとも容易くジャン・クリストフをドイツ人にしたことに驚いてゐる。ロランの嗜好、傾向、反応そして意志がいかにドイツを意識していたかが明確だったのである。一九一六年といへば、フランス人がドイツへの憧れを声高に言おうものなら裏切り者の汚名を着せられかねない時代である。実際は、ロランはドイツ志向と言うよりはユゴーの様に深くロマン主義に傾倒し、それがドイツ賛美となつたのであろう。「我が友ドイツ国民よ、私がいかにあなた方の旧きドイツを敬愛しているか。私も皆さん同様にベートルーベン、ライプニッツ、ゲーテの息子なのです。」(「戦いを超えて」)時代の潮流がどうあれドイツを賛美したのはユゴーも同じである。一八四二年に「ライン川」の中で、フランス人でなかつたなら、ドイツ人になりたかつたと語り、「ドイツとフランスは文明の本質であり、ドイツは感じ、フランスは考える。感情と思考こそ文明人の全てである。フランスとドイツは過去においても、現在においても、未来においても兄弟である」そして一八六四年の「ウィリアム・シェイクスピア」で人

類の歴史を彩った偉大な人物について触れているが、「ドイツには全てがあり、全てがいる」合理的な分析抜きのみでドイツの天分を表現するのに最適なのが音楽だと続けている。「音楽はドイツの言葉である。」「偉大なドイツ人はベートーベンである。」このベートーベンをテーマにロランが作品を残し、音楽を最良の媒体にしてドイツは世界と繋がる。

こうして視ると、ユゴーがジャン・クリストフの登場を予告していたと言っても過言ではあるまい。戦争の危機を前にした旧きヨーロッパの主人公がドイツ人であったのも偶然ではあるまい。おまけに彼は音楽家であり、音楽という普遍的な言葉で政治的諍いを超えて民衆の団結を切願する。彼が熟知するフランス人とドイツ人が共に人類の進歩のために貢献する。それを繋ぐのがユゴーの作品にもあるライン川だった。「ジャン・クリストフの運命は生命の力を河の両側で敵対する民に運ぶ動脈になることだ。河の両側には傷つけあう代わりに団結して働ける生命の力があるのだ。」

結論 時代遅れの作家？

革新派の作家。靈感に富んだ理想家。ヨーロッパ人作家。ユゴーもロランもこう定義できるかも知れない。ロランが扱ったテーマは十九世紀の共和国の理想そのものである。ユゴーが訝えた言葉と豊かな着想に支えられ、実に見事に表現したこの理想がロランにも影響を与えぬはずはなかった。

こうして、ロランの作品の辿った運命の謎、特に、なぜあれだけ賞賛されながら読まれなくなってしまったのかを理解できる。ユゴーもその死後浮かばれない時代が何十年も続いた。革新派であれば同時に唯物論者であり、無神論者であった時代に、ユゴーの寛大な理想主義や神への信仰、魂への信仰、良心は非難を浴びた。生前にもこの非難は

あり、ゾラなどは年中祈りを捧げているユゴーの姿を理解できなかった様だ。そのユゴーが再び認められたのは、この理想主義者が思想家ではなく類い稀な文才を持った詩人だったからだ。言葉に全く新しい息吹を吹き込んだこの詩人が近代詩の原点といわれる所以である。

ロランも浮かばれぬ時代を迎えたことはユゴーにならうが、寛大で現実にはそぐわない時代遅れのロマン主義と批判され、今に至っている。ロランは、偉大な作家（ユゴーが最たる例だが、他にミシュレやジュールジュ・サンドなど）を得て華やかなりし頃のロマン主義をそのまま引き継いでしまったようだ。

後に、ロランがソ連共産主義などの大義や政治行動を支持したことが批判されるが、間違いを犯したフランス人インテリはロラン一人ではない。エリュアール、アラゴンも盲目的であった。

問題はロランは思想家ではあったが、作家として認められなかったことである。彼の表現はナイーブで、不器用で文体が平坦であると言われる。「ジャン・クリストフ」でも紋切り型の言い回しや無駄な描写が多い。ただ、確かに文章はうまくないが、ロラン自身が大衆文学者であるために、まず理解されることを優先したのだ。「真直ぐに語れ。理解してもらえないように語れ！」一部の感性の優れた人々にはなく、無数の凡人に理解してもらえないように！理解され過ぎることを恐れてはいけない！曖昧さは避け、明確に、断固として語れ。たとえ、重苦しくなったとしても！（「ジャン・クリストフ」の序文）プルーストやジッドの時代にあつて、この文学的概念は些か単純である。偉大な言葉の操り人であったユゴーの後継者となることを放棄することである。ロラン・バルト曰く「ロマン・ロランは作家ではなくもの書きだと認識される。」更に、「魅せられたる魂」や「ジャン・クリストフ」などの歴史的大河小説も生前から文学ジャンルとしては旧いと考えられるようになった。語りというキャンパスに作作的にテーマが塗り付けられ、ストーリーが延々と平坦に続き、多くの登場人物に本当の存在感がない、という印象を受ける。

ユゴーに多大な影響を受けたと思われるこの少しナイーブな理想主義者は文学的才能においてその野心に達しなかつ

たと、言えるだろう。彼の不遇な時代が終わるとすれば、彼がクリエーター、広い意味での詩人として再認識された時であろう。「コラ・ブルニョン」が最も読まれている作品であるのも偶然ではない。ユーモアに富むだけでなく、書く喜びに溢れ、文学的にも他の作品からは卓越して充実しているのだ。他の作品は、歴史の証人ではあるが、文学としては少々ナイーブで時代遅れな大河小説の域をでないのか。「大衆小説」「読み易さ」といった評価もロラン自身の選択に依る。私は今後のロラン研究で、この偉大なアンガージュマンのインテリ、偉大な時代の証人が本物の作家だったことが証明されることを期待している。

我々の時代は皮肉的である。ロランの誠実さ、距離をおけない純粹さは受け入れられ難いのが現実である。それにしても、ロランの作品は読むに値するもので、ロランはユゴアの世紀とサルトルの世紀を繋ぐ重要な鎖であり、十分に知的関心をそそる作家である。

二〇〇一年十二月二十一日 ロマン・ロランセミナー講演会から

(東京都立大学助教授・仏文学)

人生の秋にロマン・ロランを読む

青木 やよひ

ロランは不思議な力を持っている作家です。

かつて私の若い頃には——もう五十年も前のことですが——ヘッセなどと共に、青春作家というイメージがありました。これから人生をはじめようという青年が一度は読んでおくべきものとして、広く推奨されていたのです。ですから、その年代で『ジャン・クリストフ』などを讀んだ人たちは、その後社会でもまれて中年になったあとでは、ロランはもう“卒業”したものとして読み返すことはあまりなかったのではないかと思います。

私もはじめて『魅せられた魂』に触れたのは二十歳前後のことでしたが、これに感動したのがきっかけでみずず書房に入ることができ、二十年間ロラン全集の仕事にたずさわりました。そのおかげで、普通ならせいぜい二、三回くらいしか読み直すことのない『クリストフ』とか『魂』のような長篇まで、十回以上は読み返したわけです。

そして、もう筋はよくわかつているはずなのに、その度に新たな感動に会おうのです。二十代、三十代、四十代と、時を隔てて対面するロランの作品、私の場合とくに『魅せられた魂』でしたが、その度に、「え？ 前に讀んだとき、こんなこと書いてあったかしら？」と思う個所に必ず出会ったのです。若い時には、どなたもそうだったと思います。が、アンネットが恋人のロジェに言うことが、もっとも強く印象に残りました。三十代には、人生に絶望した彼女が暗闇でショパンを聴くところに打たれ、四十代には、息子を殺されたアンネットに、キャレンツァ伯爵がインドの

「マーマ」について話をする場面が心に沁みて、校正をしながら顔が上げられなくなったのを覚えています。

その後自分が女性問題にとり組むようになって、アンネットこそ——作中人物ではありませんが——先駆的な女性解放の実践者であり、それによって「自己自身への誠実」という人間にとつての新しいモラルが提示されたことに感銘しました。(ちなみに、この十年ロランの「ベートーヴェン研究」に関する資料を渉猟するうちに、アンネットの人物造型にテレゼ・ブルンスヴィックの人間像が少なからずとり入れられていると、私には思えるようになりました。ロランがテレゼにひじょうに心酔していたことが、ハンガリーのベートーヴェン研究家チエケ女史との文通でうかがえます。)

最近、文明の行方や個人の存在を支える根元的なアイデンティティの問題を考える中で、『内面の旅路』で語られているロランの思想の深さに感銘しています。そんなふうには、ロランは何歳になつて読み返しても、必ず自分の問題意識に応えてくれます。これは恐らく、作品の背後にある著者の世界の大きさと深さの反映であり、自分の精神的成長につれてそれが見えてくるのだと思います。

ロランの平和主義の原点

その一つの例として『クレランボー』のことをとりあげたいと思います。ロランの小説の中ではいちばん地味なもので、読まれることも少い作品かもしれません。これは「戦時下のある自由な良心の物語」と副題にあるように、第一次大戦下で五十歳前後だったひとりの知識人の、国家や戦争に対する考え方の変化の軌跡を描いたものです。

おそらくこの作品は、『戦いを超えて』によってひき起されたロラン自身への人々の憎しみの嵐の中で、彼が体験し観察した人間の心理や社会のメカニズムが基盤になっていると思われまふ。しかし自分が若い頃は、単に「平和」という信念を守って殉教者のように死んだ詩人の話、というふうには読んでいなかったのです。また、民主主義こ

そが人間の自由の基盤だと信じられていた一九五〇年当時、この作品の中でデモクラシーという概念が批判的に語られているのも、私には腑に落ちないことでした。

しかし今回読み返してみても、ロランがここで書き残したかったことは、普段はまともな常識をそなえているかに見える知識人たちまでが、いったん事が起ると「祖国愛」や「戦争の合理化」に狂奔するにいたる心理のメカニズムと、それを煽動する世論という怪物の働きだったのだ、ということがわかりました。ロランはこう言っていたのです——「現代では、子供の頃からすでに、否認なしにデモクラシーの桶の中に投げこまれるのだ。社会がお前たちに代って考え、社会の道徳がお前たちに代って意欲し、その国家がお前たちに代って行動し、その流行と世論が」人々を支配するのだ、ということですよ。

考えてみれば、ヒットラーのナチスでさえも、はじめは合法的な選挙というシステムに則って、つまりデモクラシーのよそおいの下で、大衆の圧倒的な支持によって出現したのです。そしてこの危険な社会的構図は、現在もけっして変わっていないと思います。いま私たちも、身近かに戦争こそありませんが、容易ならざる時代に生きています。よかれ悪しかれ世界が狭くなって、地球のどこかで起ったことでも、世界中が影響を受けるからです。ロランがここで伝えようとしていることは、一人一人の人間がアイデンティティをしっかり持って、たとえ辛くても現実をありのままに見つめ、現実を糊塗するようなセンチメンタルなヒューマニズムや勇ましい祖国愛などのイデオロギーにとりこまれないようにしなければならぬ、ということだと気づいたのです。そして次のことばに出会って、私は時代に先んじたロランの明察に、頭を垂れざるをえませんでした。

「彼（クレランボー）は、人類が殺人的運命に身をささげているのを見た。地球を荒らし、他の種を滅ぼしたのちに、人類はわれとわが手で身を滅ぼしつつあった。」

昨日書かれたかのようなこの文章は、第一次大戦中の一九一六年に書かれ、世に出たのが一九二〇年ですから、い

まから八〇年以上前、日本では「大正デモクラシー」がはじまったばかりの頃です。大戦下にあったヨーロッパでも、戦争は一時的な退行現象であって、「人類の進歩」という観念は、いぜん根強かった時代です。もちろんまだ誰も、環境破壊のことなど考えてもいなかったと思います。

ロランが描いた老年

じつは今回のテーマを頂いた時、自分たちの世代にふさわしい主人公を、ロランの作品の中に探しました。と言いますのも、クレランボーやピエールとリュースはもちろんですが、クリストフもアンネットも、正確には書きこんでありませんけれど、六十歳になる前に生涯を終えているのですね。

そこで、圧倒的な存在感をもってまず思い出されたのが、『獅子座の流星群』のクルトネ公爵でした。ト書きには五十八歳とありますが、十八世紀の人ですから、当時としては立派な老年だったと思います。フランス革命で祖国を追われて、スイスに亡命している大貴族ですが、環境に適応して堂々と生きている魅力的な人物です。じつはこれは実在の人で、ロランはこの作品を書くために綿密に史料に当たったようですが、戯曲ですから、もちろんロランの創作といえます。

公爵はその亡命先の村で、かつて敵対していた革命派の一家と知りあい、その十五歳の病気の息子と親しくなりま
す。この二人が交わす会話がじつに含蓄にとんでいるのですが、その中にこんなフレーズがあります——「二十はたち前と六十歳すぎは、子どもという同じ年齢だ。その間にいる人間は、現在しか認めない愚か者なのだ。」

これを私流に解釈すると、子どもと老人は、目先の出来事にふり廻されている現役世代に比べて、自然の美しさや人生のドラマをゆったり味わうことができ、夢みる力を持っている、ということかと思えます。

また少年が「なんて人は苦しみあうものなのでしょう」といえば、「そう、それが人生というものだ」「人の魂には

たくさんのデーモンがいる」と公爵は答えています。この人の魅力は、クレランボーの純粹さとはちがって、自分の中に善も悪も抱えこんでいて、それを自覚しながら生きてきたことです。彼は、自己省察と寛容によって年と共に執着や憎悪からぬけ出して、誇り高く自分を統禦している。これこそ、眞の人間の高貴さというものかもしれません。ロラン自身の老年の理想像が投影されている、と読めるような気がします。

もう一人私がロランの作中人物で心惹かれていたのは、『魂』に出てくる先述のキャレンツァ伯爵です。シチリアの領主で幸福の絶頂にいたとき、大地震で家族もろともすべてを一瞬のうちに失うという悲劇を体験した人です。アシネットが知りあったときはすでに五十代から六十歳くらいになっていて、悲劇から再生した洒脱で美男の中高年として登場します。インド哲学などの東洋思想に造詣が深く、一方では反体制的な地下組織に関わりがあるようでもあり、最後にはチベットで行方不明になっています。

クルトネ公爵のどっしりとした存在感と、キャレンツァ伯爵の、イタリヤ的な軽やかさの中にある一種の虚無感とは、対照的ですが、どちらもロランが好んだ精神の高貴さという点に共通項があるように思えます。

ロラン自身の老年期

人の老年期をいつからとするのかわかりませんが、四十八歳で滞在中のスイスで第一次大戦に遭遇して『戦いを超えて』を発表し、六十一歳でファシズムの抬頭を目撃し、それ以後反ファシズムの論陣を張りながら七十三歳で第二次大戦を迎えて、その完全な終結を見ずに、一九四四年に亡くなったロランには、クルトネ公爵のように老年期を味わうゆとりはおそらくなかったことと思われれます。

一九三六年に、国際的な七〇歳のお祝いが行なわれたとき、それに感謝してヘルマン・ヘッセに書いたロランの手紙があります。

「私は、私の生の夢を生きたことはなく、その運命を生きました。そして私の運命は、私がそこに着いたら休息しようと思っていたどの宿駅でも、新しい戦いを私に命じました。けっして休息はありません。——しかしいつかは休息に到達するでしょう! ……そうした幸福なとき……私はミュッセのように柳の木ではなく、陽に照らされた一本のオリーブの木を夢みます。……一生私は、二十歳の頃のイタリアへの郷愁を持ち続けています。」
なんと胸をえぐられるようなことばでしょうか。

この手紙の二年後に、ロランはフランスのヴェズレーに家を買って祖国にもどっていますが、一九四〇年にパリが陥落してドイツ軍がフランスに進駐します。ロランの家の前の通りの向い側に憲兵の監視所が設置されて、出入りする人がきびしくチェックされていたと言います。いつドイツ兵に踏みこまれて家宅捜査され、逮捕されるかわからない危険な状態だったようです。一方では、クレランポーをおそったような暗殺の恐れもありました。

その上、戦時下では誰もが体験した食糧や生活用品の窮乏ものしかかかってきます。こうした中で「ペートルヴェン研究」の連作『第九交響曲』などの三作や『ベギー』などの大作を、七十歳をすぎたから仕上げているのは、マリイ夫人の献身的なサポートのおかげだったと思われれます。それにしても、困難な状況の中で大病をかかえながら、最後まで執筆にはげんでいたロランの気迫には圧倒されます。

そして幸いにも、亡くなる前の一九四四年にバリ解放を知り、診察を受けるために時々パリを訪れることもできるようになったということです。

このようにロマン・ロランの晩年をたどってみると、現代のわれわれ日本の老年世代が、いかに環境的に恵まれているかを感じます。若い頃から病弱を運命づけられていたロランの健康状態を考えると、高齢化の問題は体力の衰えにあるのではなく、その気力にあるのだと教えられます。私も自分の仕事可能な年齢を八十歳までと考えていましたが、もし寿命が与えられるなら、その先まで目標を持ちつづけようという気持になりました。



「魅せられたる魂」最終巻 アンネット像

描画 / Pierre Rousseau

そして、充実した人生とは、何か華々しいことをやりとげることではなく、たとえ貧しくとも自分の運命を十全に生ききることだと、改めて肝に銘じました。このような機会を与えて頂いたことに、心から感謝を申し上げます。

(評論家)

ロマン・ロラン『最後の扉の敷居で』から 3

村上光彦

先に見たように、ロマン・ロランとカトリック教会関係者との交流のきっかけを作ったのは、神父の卵のレーモン・ビシャルだ。彼は、当時はまだカトリック学院で神学を勉強中の身だったが、一九三六年五月一日に思いきってロランに手紙を書き送ったのだ。彼がその手紙を書いた二日後、フランスの総選挙で人民戦線派が勝利を収めた。同年の秋には独伊枢軸協定が成立、ついで日本も仲間に入って防共協定に調印している。一九三八年九月のミュンヘン会談が片時の平和の幻想を振り撒いたにもかかわらず、それから一年と経たない翌年九月一日にはドイツ軍がポーランドに進撃し、第二次世界大戦が勃発する。そういう時代背景があったのだから、始まったばかりの交流の背後に戦争の予感に満ちた重苦しい空気があったことを念頭に置かなくてはならない。

この文通が始まって三年、まさにヨーロッパが戦争に突入する年の四月、フランス東南端のアルプ「マリティーム」県の小都市ムージャン（カンヌの北方）のラ・マルタシエールに滞在中のジャン・サンソリウという神父から、ロマン・ロランにあてて一通の手紙が届いた。『最後の扉の敷居で』の資料四の手紙だ。サンソリウが言うには、彼はレーモン・ビシャルの友人で、ビシャルがバリのカトリック学院内に作った何人かのロマン・ロランの《弟子》のひとりであり、ロランの作品を読みだして一年になるとのことだった。《印刷されたページの背後に生身の人間を探し求めて》、『ジャン・クリストフ』の著者と出会いたくなくなった、と申し出ている。彼の見るところ、ロマン・ロランは

賢者にして思想家の生活を営んできた人だから、その知的な生き方は、彼が（人類にとって有用な知的なはたらき）に近づいてゆくのに役に立つように思えたのだという。

その数日後、ロランから面会の許しを得たサンソリウ神父が、パリに帰る途中にヴェズレーに立ち寄ってロランを訪れた。ロランは四月十九日の日記に神父の印象をこう書き記している（資料五、日記抜粋）。「二十九歳の、背の高い、頬のこけた青年で、自発性があり、聡明で、心が温かい。シャンパーニュ地方出身者だ。彼が言うには、カトリック学院にはわたしの（弟子）が何人かいて、神学校での黙想中にさえ、わたしの本を熱心に読んでいるとのことだ。それも『ジャンクリストフ』だけでなく、『ガンディー』や政治的著作にまで心を燃やしているのだ。わたしの考えに同調するとはとても言いがたい若者までも。（そういう人たちにも、わたしは新しい地平を開いたのだという）。これらの若者は精神がとても自由で、職業的な知識人とくらべて、精神的労作についての判断力がはるかに健全だし、もっと男らしい。サンソリウの話から判断すると、そこは一種のエコール・ノルマル・シュペリユールであって、ただしそこでは精神的価値がいっそう重んじられ、しかもそのことが知的価値を損ねることがない」。

ロランの感想では、彼らはみずからの、また先輩の世代を飛び越して、ロマン・ロランの世代に戻ってきたのだ。彼らの目には、ロランの世代は多くの点で、より豊饒な教養を提供してくれるように見えるのだ。「彼らのカトリシズムはたいそう自信に満ち、自由思想や無神論思想にたいしてさえ友愛を抱いている。ただしそれらが純粹で、誠実で、私心を去った思想であればのことだが。レーニンの生涯さえ（シャルルとかいう人の伝記をとおして見た生涯だが）彼らの心に深くしみこんだが、それで信仰をかき乱されることはなく、かえって信仰に新しい息吹を吹き込まれたのだという」。

二時間にわたって話し合うあいだ、ぎこちなくはあったが、二人はずいぶん多くの問題を取り上げた。たがいにとても身近な、それでいて遠く隔たった感じがした、という。とくに（へりくだり）の美德が話題になったときがそう

だ。ロランは言った。「まさにそのせいで、わたしは信仰に入る道を封じられたのですよ」。するとサンソリウは、困ったような口調で言った。「でもそれこそ、わたしを信仰へ引き入れてくれたのですが」。そして、つづけてこう言った。「そうですか、先生の世代では、もっともすぐれた賢者は、へりくだりからのゆえに信じてはならないと思ってしまうたのですね。——しかし今日の無神論者のばあいは、へりくだりからではないのです」。ロランはこれに答えて、その時代の盲信のはびこりようを問題にした。「ヒトラーのような連中でさえ、信仰に幻惑されているのですよ。最悪の危険はこの方面にあります。だからこそ、その反作用で、精神は傲慢な合理主義の方向へ進んでゆくのです」。

訪問の翌日、サンソリウはヴェズレーを去るにあたって、心の通いあった一夜を過ごせたことを感謝して、ロランに礼状を書き送った（資料六）。そのなかにこういうくだりがある。「なにごとかを完璧に行えば、そのことで普遍的になれるのだ、というお考えが心に残りました。先生はことについてにそうおっしゃったのですが、先生がそう考えられたのはことのついでではございません。なぜかと申しますと、先生はそこをお考えを身をもって生きておられるからです。サンソリウは、ロランの《使徒的精神》が論争的行動のなかで浪費されるのではないかと危惧していたのだが、ロランが熱中しながらもみずからの思想と行動とを統御しているのを見てとったのだ。彼は「知性的生活は聖性の問題ではないでしょうか」と、神父らしい言い方をしている。彼としては、ロマン・ロランの政治的発言がキリスト者の発言であり、したがって《聖性の問題》にはかならない、と思いたいのだ。彼は言う。「キリスト者は、先生のようなキリスト者は、みずからの触れるものごとを浄化します。またみずからが仕える大義はみずからの手の中で聖化されるのです。このような次第で、先生は共産主義をば、それが戦う相手の人たちをも引きつけるものにまでなさいました」。彼が言いたいのはこういうことだろう。共産主義は《教会》と敵対している。ところがロランが共産主義について語っていることを読むと、共産主義者が主張していること、たとえばファシズムと戦う必要とか、不正

な社会体制のもとで貧困に苦しむ人たちの存在とかいったことがらが、政治の次元を立ち越えて《聖性の問題》に属しているのがわかる、というふうに思いたったのだと見ておこう。

おりしも《人民戦線》の高揚期だった。この運動の中核をなす反ファシズムの思想はヒューマニズムに立脚していた。四方八方からその旗のもとに結集した人たちにとって、ロマン・ロランはこの高邁な精神態度を体現する存在だった。おそらくプリシヤールやサンソリウなどの若い神父たちは、敬愛するロランの生き方を聖性のひとつの現れと認め、彼を信頼するがゆえに彼の支持する《人民戦線》をも《聖性の問題》とみなしたのでろう。彼らにとっては、人民戦線派の社会的要求もまた、キリストの教えと矛盾するものとは映らなかつたのだ。こうした神父たちがいたという事実には、一九三〇年代、とりわけ第二次世界大戦前夜の時代相の特質を見てよい。

そしてサンソリウ神父はロランにこう書くのだ。「わたしは《教会》のなかでそのことを行いたいと思います。ただ、さらにいっそうへりくだりながら、ではありませんが。それというのも、わたしは《教会》の預言者でも批評家でもないのですから。また、僧衣を着用する者として、わたしは果てしなく長い聖人の系列のうしろについて並んでいるのですから。なおそのためには、わたしはその系列にふさわしくないことをせぬように努めるだけでよいのです。しかしみずからの召命に感じながら、先生が示してくださいました模範が果たした役割を心得ておりまして、それに感謝申し上げるものです」。

ロランは折り返しサンソリウ神父に返事を書いて（資料七）、「あなたを見てみると、いくぶんか昔のわたし——それからずっと、いまも当時のままなのですが——に再会したような気持ちになりました」と語りかけた。つぎにロランは、これこそぜひ知ってほしいという気持ちの透けて見える、熱意のこもった何行かを書き送っている。

「なによりも大切なことがあるのに、わたしたちはその話をなにもしませんでした。わたしが社会行動に参加していることについて、あなたは残念そうに、また不安げにお話になりましたね。あなたには、あなたやお友だちの方々には、つぎの点がはっきりわかっておられないようです。つまりこの行動は、正直であるべきだ、自分自身にたいして誠実であるべきだという、逆らいような義務によって課せられた必要事なのです（わたしにとって喜ばしいことではなく、——むしろ、わたしには《存在》に集中したい、沈潜したいという本能があるのに、そういう本能には反することなのです）。精神的純粹を保つべしというこの義務には、ご自分もたいそう高い価値を付与しておられませぬ。それというのも、わたしはこのことを明瞭に知覚しているからです。すなわち、悩みかつ戦っている実在する人類は、生ける《神》の一部なのだということを。そして、もしわたしが人類の境遇への関心を捨てようものなら、わたしは利己主義者として糾弾されているのを感じないではいられないでしょう（わたしは知識人だからと、あれこれの立派な理由を申し立てることもできません）。しかしわたしは、そんな理由は自己満足のための虚偽だとして押しおきます）。あなたは共産主義、社会主義などの単語を口になさるとき、党派的テーゼの意味で考えておいでです。わたしはというと、搾取され、また虐げられている地上の諸国民が、限りなく深い極貧のなかで発する呻吟に耳を傾けているのです。そこでわたしは、より正しく、またより人間的な社会状態を組織立てようと努めつつ彼らの解放を志す人たちに手を差しのべるのです。これこそ宗教的な魂にとって第一の義務です。わたしがある党派に従属するなどはと思わないでください。わたしは以前からずっと、みずからの魂をあらゆる絆から自由なままに——ほとんど自由すぎるままに——保ってまいりました。わたしにとってこのうえなく大切な絆からさえ、——いままさに熱情に身を焼かれているというときに、みずからの熱情からさえ。みずからの思考から生まれた存在たち——わたしの身内にはこれらの存在がとりついているのですし、わたしが彼らを作り上げたのだというのに——からさえもです。しかし、わたしは前進中です。（しばしば前人未踏の）道を、いつも前へ前へと進んでいます。——あるいはすくなくとも真

理がはるか彼方に微光を放つのが見える方向へと。そしていまは片時のあいだ、街道を切り開こうとして、また沼地に迷い込んでしまった人たちを助け出そうとして、雄々しく立ち働いている一団と合流しております。わたしはよく知っているのですが、この一団はある宿駅に辿り着いて、そこに宿営したいと願っています。宿駅よりずっと先のほうへ延びているのです。——人類のありとあらゆる努力のずっと先のほうへ。日々の労苦、日々の喜び、日々の信仰は、その日で足りません！ 勇気を出して、そしてまじめに、それらの労苦・喜び・信仰を担っていかなくては。しかも、生ける、また自由な〈永遠〉との接触をひとときも絶やすことなく。

三カ月経った七月（何日かは不明）、ロマン・ロランは日記にサンソリウの来訪を記録している（資料八）。彼はパリからローマへゆく途中、ヴェズレーに立ち寄ってロランに会ったのだ。「この目の澄んだ背の高い青年は、熱烈かつ無邪気に、ひたすら聖性を渴望している。わたしはこの渴望がいけないと言いはしなかったが（それどころではない）、社会的な義務を思い起こさせて彼の心をかき乱した。最初の訪問のこと、その後のわたしの手紙のことを、彼が長いあいだ思いめぐらしていたのがわかった」。

この三カ月のあいだの国際情勢は、戦争にのめり込んでいきそうな気配ながら、空一面に暗雲が立ちこめている隙間から、ときにうっすらと希望の薄日が差し込んでくるようでもあり、心もとなかった。五月二十二日にはミラノでイタリア外相チアノ伯爵とドイツ外相のリッペントロップとが会談し、独伊両国間の同盟を確認する（鋼鉄協約）に調印した。独伊の（レーベンスラウム）（生活圏）の安全を確保するのが目的という触れ込みだった。五日後の五月二十七日には、フランス、英国、ソ連の三国間で交渉が始まった。英仏はソ連にたいして小国の独立維持のために力を貸してほしいと申し入れた。しかしスターリンは、英仏が弱体なのを見抜いていたから、このころすでにドイツと手を結んだほうがよいと考えていたらしい。それでも七月二十四日、ソ連は英仏両国と参謀部会談を開始することを承知し、そして英仏の代表団が八月十一日にモスクワに到着した。

ここで個人的な連想を挿入するが、ぼくが小学生になる直前、つまり一九三四年ごろのように思うのだが、小野巡という巡査出身の歌手がいて、《生命線》をテーマにした流行歌を歌っていた。家にそのレコードがあって、「せいめえいいせん」という箇所が節回しがいまだに記憶の底にこびりついている。満州建国から間もないころだったから、満州は日本の《生命線》だという趣旨の歌詞だったのだろう。武力を背景に隣国の領土に土足で踏み込んで、日本人が生きてゆくにはこの土地が必要なのだ、まったく手前勝手な主張をしていた時期のことなのだ。満州国建国宣言なるものが打ち出されたのは一九三二年三月のことだ。その翌年には、ドイツではヒトラーがナチス政権を樹立した。日本の軍部は、ナチスの理論家が《レーベンスラウム》という観念を振り回しているのに飛びついて、すぐにその真似を始めたのにちがいない。思えば、ぼくの少年期は完全に戦争に塗りつぶされていて、しまいには海軍生徒の端くれとして敗戦を迎えた。ようやく平和のありがたさを知って、いつも腹を空かしながら、それでも日本と世界との未来に希望を持つことができた。そういうときにロマン・ロランの存在を知ったのだから、半世紀のあいだロランに関心を抱きつづけるだけの理由がぼくなりにあつたわけだ。こうしてロランの足跡を辿りながら、ぼく自身はこの時期にどうだったかと連想を走らせるのをお許しいただきたい。

第二次世界大戦が始まる年の七月末、サンソリウ神父に続いて、レーモン・ピシャル神父（彼はその年の三月に司祭に叙任されたばかりだった）がヴェズレーに立ち寄ってロマン・ロランと面談した。ピシャルは事前に連絡を取るさいに、ロランへの手紙のなかで《ノルマンディーのクリストフ》のことを話題にしたらしい。ピシャルの手紙が残っていないので、彼がどういう人物について語ったのかはわからない。ロランは返事（資料九、一九三九年七月二十九日付）のなかでこう書いている。「あなたのいう、翼がもぎ取れ、彼の《神》の後光が消え失せたノルマンディーのクリストフは美しく描けています。——もっとも、わたしと魂の血筋を同じくするジャン・クリストフたち

には、信仰が——もろもろの信仰が——欠けていたなどということはけつしてありません。あなたがたの仲間の誤りは、自分の信仰のほかに信仰はない、——その外に出たらなにもかも空虚だ、と思ひ込んでしまうことです。世界は充滿しています——〈神〉で充滿しています。ビシャルが彼の手紙のなかで語った人物は、おそらく彼となんらかの交渉のあった男で、誠実で、男らしく、道徳的に非の打ち所がないのに、神父から見て残念なことには信仰がなかった人なのだろう。つまりロランのジャンクリストフを思わせるようなところがあったのだろう。神父にいわせればこのクリストフは、信仰さえあれば聖寵によって超自然の力を与えられ、翼を力強くはばたかせて天空めがけて飛翔することもできただろうに。信仰がないばかりに、翼が碎け折れ、尾羽打ち枯らした姿で、神なき存在の悲惨さを曝していたのにちがいない。ビシャルは神父らしく、ロランがカトリックの信仰がないばかりに永遠の救いを得られずになってしまうのではないかと心配して、ほんとうに親身になってロランの救霊を志していたものと思われる。彼は〈ノルマンディーのクリストフ〉の哀れな姿をデッサンすることで、ロランに彼の意のあるところを伝えたかったのだ。結局、信仰の私たちをめぐっての考え方の違いがロランの死まで続くことになる。神父たちにとっては、幾種類もの信仰があるなどということはとうてい認められなかったのだから。

ロランはこの年の四月にサンソリウにあてて書いた手紙(資料七)では人類は〈生ける〈神〉の一部だ〉と書き、いままたビシャルには〈世界は〈神〉で充滿している〉と告げている。これはロランが青年時代に到達した考え方が少しも揺らいでいないことを教えてくれる。彼は『真であるが故にわたしは信じる』のなかでこう言い切ったではないか。「神とは世界を包含する無限の単一性(統一)である。神はすべてのものであり、また至るところに偏在する」(姥原訳による)。しかし神父の見方からすれば、こういう真実の信仰を欠いた有徳の士は、キリスト以前の古代の賢人たち——ソクラテスとかプラトンとか——が落とされたところ、すなわち〈古聖所〉へ送られることになる。

ビシャル神父がロランを訪れてから二週間後の八月十四日、ソ連は英仏との交渉の席上で、ドイツと戦うことに

なったらソ連軍にポーランド領内を通過する権利を認めよと言い出した。ポーランド政府はこの要求を拒否し、あとでフランスの要請で受諾した。その直後の八月二十三日、英仏とソ連との交渉をよそに、リッペントロープとスターリンとが握手して独ソ不可侵条約が締結されるのを、英仏代表団はそろそろ予想してしかるべきだったろうに。ついに九月一日払暁、ドイツ軍部隊は宣戦布告抜きでポーランド国境を突破し、空軍は各地の都市・港湾に爆撃を加えた。第二次世界大戦が始まったのだ。九月三日、駐独英仏大使は、リッペントロープ外相にあいついで最後通牒を手渡した。開戦するや、パリ市民はすぐにも空襲が始まると思つて覚悟を決めた。政府機関も学校も疎開を始めた。しかし、西部戦線での戦闘そのものはまだ小手試しの段階を出なかつた。じつに、翌年五月までは、西部戦線では動きのない《おかしな戦争》が続いていた。戦火はもっぱらポーランドに集中されたのだ。

さて、ポーランドの運命は二週間で決着がついた。九月十六日、独ソ不可侵条約によつてソ連の分け前となつた領土に向かつて、赤軍が怒濤のように侵入してきた。フランス共産党は、この不可侵条約を擁護し、フランスおよびイギリスの参戦を帝国主義的侵攻と決めつけたため、九月二十六日に解散を命じられた。九月二十八日、ポーランドは降伏した。十月一日、フランス共産党の代議士たちは下院議長ドゥワール・エリヨに書簡を送り、ヒトラーのナチス・ドイツと平和交渉を開始するよう要請した。この反国家的行動に憤慨した政府は、同月五日から十日にかけて、共産党代議士三十五名を逮捕した。書記長のモリス・トレーズはロシアに逃亡し、やがて脱走罪に問われて欠席裁判で有罪宣告を受けた。しかし、フランス共産党員のすべてが、スターリンの厚顔無恥な選択を黙つて受け入れたわけではない。当時、共産党は上下両院合わせて七十二人の議員を擁していたが、このうち二十二名（うち一名は上院議員）が離党した。反ファシズム闘争の戦列にあつた知識人にたいする衝撃は甚大だつた。たとえば作家のポール・ニザンも、当時コルシカで休暇を取っていたが、この《恥ずべき行為》の共同責任を拒否して離党した。なお、彼は翌年、ダンケルク撤退作戦中に戦死を遂げた。若い党員のなかには、反ファッシュの志と党の方針との板挟みとなり、いっ

そのこと兵隊になって死んでしまえば矛盾が解消される、などと悲痛な思いに取りつかれた者もいた。ニザンはというと、中学校以来のサルトルの同級生で、サルトルと同じくエコール・ノルマル・シュペリユールで学んだ秀才、つまりロマン・ロランの後輩だった。彼の世代を代表する、青春の輝きと苦悩とを背負った作家だったのだ。

この時期、ロマン・ロランが戦争の先行きをどう見ていたのか、すでにロランの日記の封印が解かれたことだし、いずれ日記に即して彼の日々の思いを精査できるものと思う。デュシャトレ氏は、京都でのロマン・ロラン没後五十年記念講演中でこう語った。

「一九三九年八月に独ソ不可侵条約が調印されたとき、彼の目から決定的に鱗が落ちました。それまでまだいくばくかの幻想を抱きつづけていたにせよ、それも消え去りました。自分がソ連に味方して参加したとき、どれほど欺かれていたかを悟ったのです。自分が自分自身に忠実でなかったことがわかったのです。

それ以後は、控えめながら断固として、彼はフランス共産党にたいして距離を置きました。彼は縁を切り、そして『日記』のなかでスターリンとその政策とを激しく非難しました」。

いずれデュシャトレ氏の研究が大成したら、第二次世界大戦勃発前後のロマン・ロランの心境をもっと詳しく知ることができよう。いまは若い神父たちとの交流を契機として、彼が《内面の旅路》を辿りながら気持ちも新たに眺めた風光を復元する仕事に努めよう。

「最後の扉の敷居で」の資料十は、ロマン・ロランが出征中のレーモン・ピシャル軍曹にあてて、一九三九年十月四日にヴェズレーの自宅から書き送った手紙だ。彼は「お手紙二通、拝受いたしました」と書き起こし、「こういう時期にこれほどの信頼と、情愛のこもったお心遣いをいただき、心を打たれました」と感謝している（なお、ピシャルからのその二通の手紙は現存しない）。思っていることを自由に書き送ることは不可能になってしまい、とりわけ

政治的な事柄については手紙では書けない、とも嘆いている。つづけて、彼は書く。

「魂の無際限の深みが、いまだあります。これが毒ガスからの避難所となります。あなたにとってもわたしにとっても、この避難所は広々として、しかも安全です。むしろ、そこに閉じこもってしまいたいという誘惑から身を守らなくてはいいけません。もっとも悲しいことに、今日の現実からすると、避難所に閉じこもってなどいられるわけがなさそうです」。

少し先で、ロランはビシャルが責めるような調子で書いてきた質問——「あなたはキリスト教徒のどこがいけないと思っておられるのですか」という悲痛な質問——に答える。なにひとつ、いけないなどと思っはいいない。キリスト教徒の信仰は、彼の「いちばん大切な友だち」、つまり彼の母親の信仰でもあった。自分は彼らの信仰の美点、よいところ、気持ちを健やかにし、高揚させてくれるところを愛している。そう書いてから、彼は付け加える。

「わたしに信仰がさっぱりなかったのは、わたししでどうにでもなることではなかったのです。——ところが、わたしには信仰がさっぱりありません。わたしはそれを人間の希望の一種（最高の一種）として認めるにすぎません。わたしは希望を愛しています。わたしは希望の翼に口づけをします。希望の躍動を砕くようなことは、なにひとつしたくはありません。——しかし、オレンジ公ウィリアムの標語のことはご存じですね。わたしはというと、希望なしです。まさかなくてはならないなどと考へてはいませんが——（それどころではありません！ わたしは精一杯希望をかき立てました）——こういうふう考へているのです。希望なしです。できなくてはならない、ありつたけの自分でなくてはならない。そして、希望があらうとなかろうと、屈することなくみずからの運命のすべてを成し遂げなくてはならず、みずからの運命のすべてであらねばならない、と。——なぜかという、それがわたしたちの生きる理由だからです。また、それが掟なのです。なぜかという、人間であるというのは、ただそれだけのことなのです。人間は希望に左右されるのではなく、希望より高いものしでであらねばならないのです。——そし

てたぶん、あなたはこうお思いでしょうね。それもやはり信仰なのだ、と。——また、信仰は「イエス・ムス・サイ
ン」(かくあるべし)「ベートーヴェンの弦楽四重奏第十六番、作品番号135の終楽章の表題」に支えられているも
のなのですが、この語句は「フィアト・ウォルタス!」(「みこころのままにならせたまえ」とかなり縁が近いので
す。この態度には、熱情的な行動のただなかでさえ、心の底では執着しない気構えが含まれているのです。その無執
着が完全なものになるには、悲しみを拭い去って、安らぎのうちに成し遂げられなくてはいけません」。

彼はさらに続ける。「わたしたちはおたがいに、まるきり遠いところにいるのでしょうか。——わたしたちのあい
だに、いったいながあるのでしょうか。キリストの約束があるのです。——あなたにとっては、それがすべてです。
(あなたにとって、ほんとうにすべてなですか)。わたしはその約束を受け取らずにしまいました。それでも、それ
を受け取ったと思って、これに栄えあらしめよう、人々に奉仕しつつそれに奉仕しようと、心の底から努めている人
たちがいますね。わたしは、そういう人たちを、親しみを込めて愛しているのです」。

ロランはこの手紙の追伸で、ピシャルにサンソリウの宛名を尋ね、「熱烈な友情をもって、彼のことを思ってい
ます」と結んでいる。

「最後の扉の敷居で」の資料十一はロランが妹のマドレーヌに宛てた、一九三九年十二月九日付の手紙の抜粋だ。
彼はそのなかで、妻のマーシャが形而上学の本や宗教書を読んでいるのにつられて、自分もクーシューが福音書の起
源について書いた本を再読して興味を覚えたし、(「恭しい無信仰者」として見た限りでは客観的だと思う、と伝えて
いる。デュシャトレ氏の注によれば、ジャン・ポール・クーシュー(一八七九—一九五九)は哲学者・医師・宗教史
家で、とりわけ「イエスは歴史上の人物か、それとも伝説上の人物か」という問題に関心を寄せていた。その著作に
は「イエスの謎」「イエスの神秘」「イエス問題とキリスト教の起源」(共著)「イエス、人となった神」がある。

またロランは、福音書を新訳で読み直して、その訳には血のたぎりが感じられ、聖パウロの野性的なエネルギーがよくわかるようになった、とも書いている。ついで彼はマルシヨンの『福音書』にも触れて、マルシヨンは「残酷で不親切な〈創造主〉」と「人間のために犠牲となり、彼らの闘争を助力してくれる、愛の〈神〉」とを区別している、とも述べている。

デュジャトレ氏の注によれば、マルシヨン（八五？—一六〇？）は一四〇年にトルコからローマに来たグノーシス派の哲学者で、目に見える世界を創造した悪しき神と、目に見えない存在を創造した良き神とを対置した。彼の見るイエスは、人間の姿を纏いはしたが、純粹に天空的な存在だという。彼には『福音書』という著作があつて、そのなかで自分の考え方を開陳したが、この著作は失われてしまった。キリスト教の著作家たちはごく早い時期から彼の教説を退け、それぞれの著作中で彼の文章を引用したり批判したりした。そうした断片を編み合わせることで、彼の『福音書』の原型を再構成する試みが可能になったのだ。

グノーシス派は単一の学派ではなく、同じ名で括られはしても、いくつもの傾向が分立していた。それでも、徹底した二元論に立ち、物質、したがって人体を本質的に悪とする点では共通していたようだ。「純粹に天空的な存在」というのは、彼らの特徴的な考え方の現れにちがいない。また、愛は神の属性かという点、それはかならずしも自明の理ではなさそうだ。たとえばイギリスの詩人にして画家のウィリアム・ブレイクが旧約の神ヤハウェを忌み嫌ったのは、ヤハウェが愛の神とは思えなかつたからではなからうか。ブレイクだけのことでなく、西欧には強圧的で理不尽な怒りの神を忌避し、愛の神を欣求する伝統があつたのは確かだと思える。では、『旧約聖書』に違和感を覚え、ひたすら「愛の神」を求めるのは、キリスト教の本流から逸れることだったのだろうか。

資料十二は一九三九年十二月十八日付のロランの日記の抜粋だ。ロランは、自分はどうしても司祭たちから遠く離

れた感じがする、と書き留めている。司祭たちが眼前にいなかったときには彼らについて幻想を描いたりもしたが、彼らのほうから接近してからは、彼らが以前と違わないのがわかって幻滅してしまう、というのだ。この不快感は、ヴェズレーの前任主任司祭で司教座聖堂参事会員が訪問したときに置いていった『聖アウグスティヌスの信仰の道』を読んで、著者の学識を認めながらも、ごまかされたような感じを受けたことに由来する。これまで紹介した、彼が若く初々しい神父たちと接したときの感想とはずいぶん違う。ここで問題になっているのは論理的思考の進め方であって、ロランが相手にするのは老練な司祭だ。共通の土俵に立って取り組むのだから、向こうの手の内の読み方も厳しさを増したのだろう。さて、ロランは書く。

「どういう点にがっかりし、うんざりして、ひそかに反感まで抱いてしまうのかというと、それは彼らが筋道を立てて考えるさいにごまかしてしまふところだ。論証すべきはずのことを、いつも決まってもなげに跳び越してしまい、そのあとでは、厚かましくもすでに論証を済ませたような素振りを見せる。そうやって、彼らの陳述をこっそりと歪めてしまふのだ。では、こうして真実を（それとも真実の探求を）ごまかし、粉飾する手口は、彼らにあっては習慣に——さらにまた法則に——なってしまったのだが、その由って来たところは、以下のいずれがいちばん大きいのだろうか。敬虔なる偽善か、無知か、それとも厳密に筋道を立てて論理的・科学的に考え進める能力のなさだろうか。たぶん、この三者すべてに由来するのだ。——こちらが三分の一、あちらが三分の一、という風に。しかも、これに付ける薬はない。彼らのそういうところを矯正しようにも、そうと言って聞かせようにも手だてがあまりはしない。それというのも、おまけに聖なる傲慢なるものがある、そのせいで論議することも許されなからだ。」

ロランはそのころスタンダールの『アンリ・ブリュールの生涯』を読んで、スタンダールが神父たちの偽善と下司根性とを目の敵にしていることに共感した。ロランはこのほかに愚鈍さを付け加えている。彼はモリエールの台詞を引き合いに出す。「耳が不自由な人のうちでも、聞きたがらないのはいちばん始末が悪い」。彼の批評は辛辣そ

のものだ。「こんな印象を受けるのだが、この法衣連中はそろいもそろって自分から耳が不自由になっている。それというのが、自分たちが生きる糧にしているものが、偽りや、錯覚や、それとも一杯の麻醉剤、麻薬、蒸留水に混ぜり込んだ千分の一もしくは二千分の一の真実にすぎないのだということを——当人たちもうすうす感づいていることなのだ——うっかり耳にしたりしてはたいへんだと思つてのことなのだ」。

同じ日記の先のほうで、ロランは十年ほど以前に、インドの神秘家たちと取り組んだあと、つぎに昔の西欧の神秘家の著作を読んだ時期もあつたことを想起する。「しかし、いまは幻滅している。——おそらく、もはや盛氣楼はいっさい無用だからだ。……わたしには自分が知っている以上に信ずる必要はない。そしてわたしにとって第一の義務は、自分にとって望ましいこと、自分の欲すること、想像することについて、わたしはそれを知っているなどと、——また、それが存在しているなどと、——自分に思い込ませたがらないことだと思える。——わたしにはわからないが、わたしはひたすら——正直に——見ようとすると、見える以上には見ないようにする。——わたしは待ち、観察し、やってくるものを受け入れる。それはわたし次第でどうなるというものでもない。わたしのほうがそれ次第なのだ。——ただひとつ、わたしがそれによって独立を保っていられるものだけは別だが——たとえそのためにわたしが永遠をつうじて無に帰することとなろうとも——すなわち、わたしの意志の真実だけは別だが。この真実が間違つていようとも（そしてそれは間違える、宿命的なことだ！）それは公正なまままでいてほしい！——誠実でいてほしい！」

もともと清浄無垢の天空的な存在である神の子が、人類を永遠の罰から救い出すために人となつて、あえて重く汚れた物質である肉体を引き受け、人類すべての罪を背負つて十字架にかけられる。肉体を引き受けたからには、刑罰の苦しみ、痛みをことごとく感じなくてはならない。『聖書』に語られているキリストのこの決意は、もし彼が神でなかつたら、つまりただの人間だったら、とても実行しえなかつたはずのことだ。では、『聖書』の叙述は虚構ではなく、神が人となるといふ奇跡が史上に一度限りじっさいに起こつたのか。そのとおりと、完全に納得できる仕方

立証されさえすれば、それにもましてありがたいことはない。受肉した神の苦惱も、その廣大無辺な慈愛も、真実と信じられるものならば限りなくありがたい。信じられるものならば、だれがかたくに拒否を貫くものか。しかし、永遠の救いがどれほどありがたかろうと、ほんとうのことなら文句なく望ましかろうと、ロランはあくまで筋道を立て、思考の手順を堅実に踏みながら考え抜こうとした。盛氣楼がまやかしなのを知ってしまったら、それが実体のあるものなどと信じられはしない。どうしても信じられないからは、ロランは精神の公正を保つ《意志の真実》によって立つ決心だった。ロランは神の救いをかたくに拒否したのでなく、得心がいけば進んで信者になっただろう。『最後の扉の敷居で』はこのようにして、ロランの誠実な魂の苦闘の最終段階に立ち会わせてくれる。

資料十三「ロマン・ロランの覚え書き」(一九三九年十二月二十一日付)は《思想のドン・ファン主義》を主題としている。ロランは思想的に浮気を重ねている、という批判を向けられることがある。彼みずから、皮相な見方をする者の目には自分が浮気と見えかねないのを認めている。しかし、彼は言う。「わたしは自分の思考にたいしてつねに公正だった」と。彼は自分の思考にたいして、先入観を課したり、魅力の感じられなくなった考え方に拘泥させたりはしなかった。「わたしは自分の思考とともにつねに真実を探求していた」と、彼は言う。真実はさまざまの形をとって現れるのだから、彼はそれらの背後に存する真実を探し求めてきた、と言う。そして彼は「それらの形を愛したというだけでは言いたりない。それらをめとった『愛する』という語にかけて《めとった》と書いているが、ここでは転義で《熱心に賛同した》という意味」。全人格的に、そのいちいちの内面に入っていた。それらの形がわたしを引き留めることができなかったのは、またわたしが自分の探求を続けなくてはならなかったのは、わたしのせいなどではない」と、彼は続ける。それが《ドン・ファン主義》だというのなら、その語にもっとも真摯な意味を付与しなくてはならない、と彼は考える。彼にとつての《ドン・ファン主義》は、うわついているどころではない。《わづかでも、いっそう多くの真実を求めて、絶え間なく努力せねばならない性情が要求するままに》一時的なものでは

ない思想とでも結婚する。そして結婚するからには、自己をまるごと施与する。つまり、彼の魂が重ねた数々の信念とのあいづく婚姻とは、そのときどきに誠実な気持ちで経験を重ね、ある経験から別の経験へと移りながらいつそう真実の解決へ接近していった道程を表している。

「なんらかの信念なり思想なりを正しく判断するには、ただ理性の批判的な光を投げかけて検討するだけでは十分である。つねづね信じてきたことだが、その思想を把握できるのは、それをわがものとしつつ、みずからの全存在をもって抱きしめるときだけである。——その内密な結合の結果、この思想をもってしては、わたしがそこから期待していた全面的真実を完全には充足しきれない、とわかったとき、わたしはそれと縁を切る。——ただし、その思想と別れなくてはならないにしても、それにたいして感謝に満ちた思い出と敬意とを保ちつづけずにはいない」。それに、別れきりでなく、時を経て再会することもある。しかもそのときには双方とも成熟している、とロランは言う。ゲーテの標語「死して成れ」を引用して、「わたしはいつも生成しなくてはならない」と、彼は付け加える。

海上ではドイツの潜水艦が英仏の船舶をどしどし沈め、また十一月末にはソ連によるフィンランド攻撃が始まった。だが、カレー海峡では依然として英国海軍が制海権を握り、独仏国境には軍事的な動きは皆無だった。九月にいったん疎開したフランスの国家機関はつきつきとパリに戻ってきた。このようにして一九三九年は「おかしな戦争」ともに年の瀬を越した。

資料十四は一九四〇年一月付のロランの日記の抜粋だが、彼はそのなかでロラン夫人が——かつて夫を共産主義へと導いた人だが——キリスト教関係の書物に熱中している様子を記している。彼女はロランの曾祖父のもっていた『聖書』を自分の枕元に置き、床についている夫に向かって聖パウロの書簡を読み聞かせさせた。デュシャトレ氏の注によると、高等中学校でロランの同級生だったポール・クローデルの日記にロラン夫人との文通のことが記され

ている。「一九二九年十二月十四日。ヴェズレーのRRの妻と宗教上の文通をどっさり。彼女は回心したがっている」。また一九四〇年二月十日土曜日の記事には、「RRの妻マリー・キュヴィリエ、書面により「ギリシア正教を」棄教し、カトリック教会に入信」とある。

三月下旬、フランスではポール・レーノー内閣が成立し、ついで英仏両国は双方とも単独で講和あるいは休戦に應ずることはしないと誓約した。ノルウェーで情勢が切迫したが、フランス本土はまだ静穏だった。そんなとき、一九四〇年四月十四日から十八日にかけて、ポール・クロードルはヴェズレーのロマン・ロラン家で過ごした。ロランの妻マリーがクロードルを誘ってヴェズレーに来てもらい、旧友再会の機会をこしらえたのだ。

資料十五はそのときのロランの日記の抜粋だ。彼はこう書き記している。

「彼の短期滞在の終わりが来てしまった。それなのに、クロードルとわたしとは、彼の心にかかっているあの題目のことで、二人きりで打ち解けた話し合いをできないままになっている。それでわたしは、これでは彼はいくぶん淋しい気持ちで帰ることになりそうだと痛感している。それというのも、彼はこの件で腹藏なく話し合えるものと期待していたからだ。

その前夜、彼が床につくために二階の自室へ登っていったあと（午後九時になるとすぐ）、わたしはあとすこしで彼の部屋のドアをノックするところだった。わたしはいくぶん気分が悪かったのに起き上がりさえし、そして彼の部屋の敷居際までいったのだ。ところが室内はもうすっかり明かりが消えていた（九時半だというのに）。だからわたしは、彼を起こしたくなかった」。

四月十八日木曜日、家へ帰るといいう日に、クロードルは七時半にマーシャといっしょにサン・ペール教会へミサに

あずかりに出かけた。雨が降っていた。教会はたいそう貧しげで、がら空きで、昔風の、陰気な黒い服を着た老農婦が五、六人いただけだ。彼はその無表情な農婦たちとともに聖体拝領し、賛美歌を歌った。マーシャは自動車で彼を家に連れ帰ったが、彼はそのあと、また坂を上って大聖堂へ祈りを捧げにいった。戻ってくるともう十時十五分前で、しかも十時半には彼はどうしても家を出なくてはならなかった。

ロランは十五分間話し合いたいと言って、彼に寝台のわきの肘掛け椅子に坐ってもらった。音楽でもてなすつもりだったのにできなかったし、宗教問題について二人で考えを述べあう機会がなくて残念だ、とロランは言った。クロールはいくらか淋しげだったが、運が悪かったと思つて諦めているらしかった。「彼はたぶん、わたしたちを導いているなんらかの意志をそこに見てとつていた。——（しかしおそらくは、わたしのほうで心を打ち明けまいと、わざと抵抗しているのではないかと疑つてもいた）……」と、ロランは日記に付け加えている。そして日記はこう語る。

「だしぬけに、わたしは寝床のうえで身を起こし、両手を彼に差しだし、そして目に笑いを浮かべながら、はっきりした口調で言った。

「さあ、——手を取ってくださいませんか……ほら……（彼は手を取り、呆気にとられたようにわたしを見つめ、この先どうなるのかと待ちうけた）……もしよかったら、いっしょに「パーテル・ノステル」「主の祈り」を唱えてもいい」。

「では、唱えましょう……」

彼はわたしの寝台の下の小さい敷物にずっしりと跪いた。わたしたちはずっと手を握つたままだった。彼が先にフランス語で祈りを唱えた。それからわたしが、一句一句、彼のあとについて繰り返した箇所もあり、またいっしょに唱えたりもした。

*

彼は立ち上がった。彼の手はあいかわらずわたしの手をきつく包み込んだままだった。そしてこの老いた大人物はわたしの老いて干からびた手に接吻した。

「いいですか、わたしとしては、これは信仰の祈りではなくて、信仰を持っている人たちと結び合っているための祈りなのです。わたしに先立っていた人たちと、わたしの親しい親族と、わたしのいちばんたいせつな友だち、つまりわたしの母とね……」。

クローデルが言うには、彼はヴェズレーに来る途中でクラムシー（ロランの生家が残っている）の墓地のそばを通ったので、ロランに代わってその母親の墓参りをしようかと思っただが、かえって失礼になってはいけないと思って差し控えたのだそうだ。

ロランは彼に、生涯ずっと、主の祈りを毎晩唱えてきたのだ、と言った。

日記は「すると、クローデルは言った」と続いている。

「わたしの理解が正しいなら、あなたは心情においてはわたしたちといっしょなのです……」
わたしは付け加えた。

「本能ですよ、血ですよ」。

彼はわたしのことを繰り返してから、こう言った。

「心情はね、たいしたものですよ……」。

「でもね」と、わたしは言った。「わたしの理性は信じないのです」。

彼はいまにも理性などだめだと言いつうに見えた。わたしは制止して言った。

「ところで、わたしは理性に執着してしまつてね。理性とは人間における神的な要素のひとつだと思つていますが、それだけに執着しているのです」。

クロードは理性が人間における神的な要素だという観点には賛成し、「ソロモンの箴言」を引き合いに出して、それが「正しく指導された理性にたいするもっとも壮麗な賛辞」だと言つた。彼はいかにも嬉しそうに、「要するに、あなたが正しい道を進んでいるのがわかりますよ。わたしたちの違いといつたら、程度の差だけです」と言つた。

この日記の残りの数行をそのまま訳しておこう。

「不寛容も無理解もいっさいなし。ほかの時、ほかの人が相手だと、彼はじつに要求が厳しいのだが……。彼はなにひとつ反対せずに、わたしの保持する立場を容認する……」。

彼はわたしに言う。

「抱擁を交わしませんか」。

彼はわたしに向かつて身をかがめ、わたしは彼の両頬に接吻する。彼はわたしに言う。

「いつなんどきでも、どちらにおられても——たとえスイスにおられても——手助けして差し上げられることがあったら、どんなことでもいたしますよ」。

彼は嬉しげに満面に笑みを浮かべて、わたしをじつと見た。彼はもう一度、わたしの手に接吻した。

それからわたしたちはマリー（わたしの妻）の話をした。マリーは大胆にも、彼を迎えにいつて、わたしたちを引き合わせたのだ」。

デュシャトレ氏はこの本の注のなかでクロードの日記の記述を掲げている。

「RRと感動的な会話。彼が話してくれたところによると、彼は要するに信仰を失ったことなどないのだ。彼は毎日『バーテル』を唱えているそうだ。わたしたちはそれをいっしょに唱える。彼に手紙を書かなくては。すっかり感動して抱擁を交わす」。

それから一カ月と経たない五月十四日から十五日にかけて、ドイツ軍四十個師団——うち七個師団は（パンツァー・ディヴィジオン）「機甲師団」——が、仏軍の虚を衝いてアルデンヌの森林地帯を急襲した。そこは樹木の密生した大山塊で、フランス軍が堅塁を誇っていたマジノ線のうち、まさかと思ってもっとも手薄になっていた地域だ。苦難の季節の開幕だった。

（成蹊大学名誉教授・仏文学）

訂正 おわび

27号および28号に誤りがありましたので、謹んで訂正いたします。

・ 27号 二行目 十五日刊→十日刊

・ 28号 p.34 三行目、p.35 二行目、p.49 左から九行目

ブリシャール→ピシャール

p.42 五行目

一九九四年十月→一八九四年十月

『魅せられたる魂』の 読書会を終えて

清原 章夫

ロマン・ロラン研究所の主な活動は、講演会および読書会と、この機関誌「ユニテ」の発行である。講演会の内容は「ユニテ」に掲載してあるので、この稿では、昨年終了した「魅せられたる魂」の読書会の内容をもとにして、その活動内容を報告させていただく。

会は年七回、一月、四月、六月、九月、十一月の第四土曜日の午後二時、四時に、当研究所で開催している。毎回、前月に選ばれた発表者が、担当する作品の部分について感想や調査した内容を報告する。時には、小説中に出てくる音楽のCDを聴かせる事もあり、発表の内容はまったく自由である。発表は通常三十分ほどで終わり、残りの九十分は、司会者の進行のもとに発表内容に関す

る自由討議をおこなっている。毎回活発な討論になり、定刻を三十分オーバーすることも珍しくはない。

さて、今回取り上げた「魅せられたる魂」は、岩波文庫で約二千四百ページもあったため、平成十年の四月から平成十四年の二月までの三年間、回数にして計二十二代でやっと読み終えることができた。その間の参加者はのべ二百五十人、各回の平均は十一人であった。年齢は三十代から九十代と幅広く、作品の内容もあってか、三分の二が女性だった。職業も、学生、会社員、主婦等と様々な方が参加して下さった。

発表者は毎回熱心な方々で、ワープロまたは手書きのレジュメを準備してこられ、コピーを参加者全員に配り発表がおこなわれた。そして、発表および討論の内容は、賛助会員の有馬通志子さんが美しい文字で要約して記録してくださり、八十ページのノートとして残っている。二十二回の、ほとんどに出席して、記録をして下さった有馬さんに参加者一同感謝している。この膨大な記録の中から私が特に印象に残ったものを紹介したい。

第一回は、宮本正清先生が書かれた「あとがき・訳筆

を措いて」を宮本エイ子さんに朗読していただいた。そこには、作品を生み出すのと同じ程の苦労が述べてあった。フランス語を読めない我々に、『魅せられたる魂』を日本語で読める喜びを与えてくださった宮本先生に、参加者一同心から感謝した。

三年も続けるとマンネリになるので、変化を付けるために、外部講師を招いた会を二回おこなった。最初は第三回で、みず書房創設者で当研究所理事の小尾俊人氏に「序文」について講演をしていただいた。通常の会では、小説の内容にしか触れられないが、この講演では、序文を書いた頃のロランの行動や、内面について理解することができ、その後小説を読み進めていくうえで大きな助けとなった。

第十七回では、戦争の不条理を突いた戦後のベストセラー『非情の庭』の作者、樋口茂子先生に、『魅せられたる魂』と世界大戦』というテーマで講演をしていただいた。樋口先生が体験された戦争とアンネットが体験した戦争を比較して述べられ、参加者一同戦争について深く考えさせられた。また、講演後の討論ではIT革命が

叫ばれている現代における教育の問題点や、読書の大切さについて論じられた。

忘れられないのが第二十一回で、当研究所常務理事の佐々木斐夫先生が『魅せられたる魂』のテキストに作曲された歌曲『アンネットの悲歌』の演奏会であった。演奏は読書会のメンバーである、下郡由さんのソプラノ、能田由紀子さんのピアノ伴奏、北条文子さんの朗読でおこなわれた。アンネットのイメージ通りの曲と演奏に参加者一同感動した。記念にCDを作製した。

討論が一番盛り上がったのは、最終回の第二十二回であった。この長大な作品を読み終えて、生きる勇氣を与えられた、得ることが多かった、本当に読んでよかったという意見が出た。そして、今後も読み続けると同時に、まだ『魅せられたる魂』を読んだことの無い若い人々にも、ぜひ読んでもらいたいというのが、参加者全員の願いであった。

さて、現在読書会では『ジャン・クリストフ』を読んでいる。まだ始まったばかりなので、ぜひ初めての方のご参加をお待ちしている。読書会の日程および内容は当

研究所のホームページに掲載してあるので、ご覧いただきたい。
(<http://www.2u.biglobe.ne.jp/~rolland/>)

(評議員)

宮本正清先生の思い出

小田 秀子

私事で恐縮ですが、夫の転勤で東京、名古屋で数年過ごし、として京都に帰ったのは一九六七年の春でした。名古屋時代の住宅は千種区徳川山町にあり、近くには名古屋大学教授の方々がお住まいでした。湯川博士と同じ物理の坂田昌一教授の奥様は、本好きの私とは毎月鶴舞図書館の読書会に出たり、国文学者の高木市之助先生の会にも参加していました。そこで学ぶ楽しみを知ることができました。

短歌会館の広い和室で高木先生はウイスキーの小瓶を横に置かれ、文学、映画、演劇と談論風発、楽しいひと

ときでした。

京都に帰ってから数年がたって何か学びたく思っていました。『宮本正清教授がご自宅でロマン・罗兰セミナーを一般に開放』という新聞記事を見たのです。罗兰は西洋で最も好きな作家で、長女の高校卒業のお祝に『魅せられたる魂』を贈ったところでした。

セミナーに出席のお許しを得るためお電話をしました。宮本先生は優しく丁寧に道筋をお教え下さいました。その頃京都を走っていた市電に揺られ閑静な銀閣寺近くのお宅を訪れました。ご門を潜ると優しい植込みに迎えられる、お玄関からはエイ子夫人がご案内下さいました。立派なお座敷二間を通した床の間を背に宮本先生が、その両側に波多野先生と大橋様が坐っていました。

リポーターのお話のあと先生が補足され、皆の討議となり、セミナーの終る頃には大皿に盛られたクッキーと、紅茶が配られました。心満たされ、お礼とお別れのご挨拶をすると、先生は玄関まで見送りにいらして「来月もまたいらして下さい。」と優しく仰言るのです。

いつか雑談の折、「戦前の日本にヒューマニズムはあつ

たのでしょうか。」とつまらぬ事を尋ねましたら「それは大変いい質問です。」と言って下さいました。

日本は江戸時代の長い鎖国や、武士道精神は歪んだ形で軍国主義となり、知性や良識を押し切り無謀な戦争に突入してしまいました。敗戦にもかかわらず日本の驚異的な発展の陰に、どれ程多くの有為な若者たちが貴重な生命を失ったことでしょうか。

若き日私は京都大学文学部木村素衛教授に私淑していました。ある日、大学の先生の研究室にお伺いしている時、突然見知らぬ男が入って来て先生とお話をして出て行きました。「今のは特高で少々うるさいんだよ。」と素衛先生が仰言いました。

そのうるさき特高は、一九四五年六月十五日突然正清先生を連行、拘禁、八月十六日、敗戦の日まで先生の自由を奪いました。お優しく、ロラン文学に生涯を捧げられた先生がなぜそのような非道な苦痛を受けられたのでしょうか。

先生の詩集『焼き殺されたいとしらへ』にはその時の先生のお苦しみが詠まれていて読み続ける事が辛くな

り、先生から直接頂いた詩集『生命の歌』を拝読したのです。先生の二十代頃の詩ですばらしく、形容し易い感動でいっぱいになりました。宮本先生は元来優れた詩人でいらしたのですね。先生が偉大なるヒューマニスト、詩人でいらした故に、ロマン・ロランの膨大な作品の名訳が成されたのですね。

先生が逝かれて早くも二十年近い才月が流れ去りました。ロラン研究所は理事長、尾埜善司様、エイ子夫人のご熱意、ご献身によってより充実発展の形で継続されています。

〈日本ロマン・ロランの友の会〉創立50周年記念では、園田高弘先生のピアノでベートーベンを聴き、例会では、岡田暁生先生の音楽談義は強い印象を受けました。最高の知性の諸先生のお話を親しく聴講し、日仏学館のガーデン・パーティーには世界的音楽家も参加されました。

また最高の女性として尊敬していた故千登三子夫人も会員でいらしてパーティーの折に親しくお話させて頂きました。

去年はロマン・ロラン研究所設立三十周年記念で、神

谷郁代先生のピアノでベートーベンの「熱情」、その他を聴き、ラ・ミューズでフランス料理のすてきなディナーパーティを楽しみました。常に精神のこよなく高い所で心の贅沢を享受させて頂いています。ロラン研究所に心から深く感謝致して居ります。

正清先生のご遺徳を深く追慕し、研究所の益々のご発展をお祈り申し上げます。

拙きペンにてどうかお許し下さいませ。

(賛助会員)



ロマン・ロラン生誕100年記念
マリー・ロマン・ロラン夫人来日
—夫人と宮本正清ほか(1967年)—

ロマン・ロラン研究所設立30周年記念コンサート

神谷郁代 “ベートーヴェンを

弾く” を聴いて

安東 民兒

京都コンサートホールでの神谷先生のご演奏を拝聴いたしました。

まさに、湧き出づる“情熱”の調べに圧倒されるばかりでありました。

あれこれ楽章の解説など、なにほどの意味もなさないと思われるくらいに、先生のピアノは、遠に崇高な演奏でありました。

美しく、強く、そして哀しみと憂いに満ちた物語そのもののピアノでありました。
ありがとうございました。

(放送作家)

ロンサートで読書に関心を

フランスの作家、ロマン・ロラン（一八六〇—一九〇四）の読書会などを開いている「財団法人ロマン・ロラン研究所」（左京区銀閣寺前町）が今月末、設立三十年を迎える。読書離れが進み、とくに若者の参加が減っているが、記念コン

サートなどで関心を高めたいという。

同研究所は、ロランの本を数多く翻訳し、紹介してきた仏文学者の故宮本正清さんが、印税を使って創立した。毎月恒例の読書会では、三年間「魅せられたる魂」を読んできたが、今月

ロマン・ロラン研究所

30周年を記念し 6月23日京都で

三十一日で終了。四月からは新しい作品を取り上げる。

研究所常務理事の宮本エ

イ子さん(左)は「ロランの本を読むと、苦難の中でいかに生きるかが、見えてくる。不透明な今の時代こそ、読まれてほしい」と話す。

六月二十三日には、左京

区下鴨半木町の京都コンサートホール(小ホール)

で、三十周年を記念した演奏会を開く。ロランが愛好

した音楽家、ベートーベンのピアノソナタを、京都市立芸術大の神谷郁代教授が演奏する。

問い合わせはロマン・ロラン研究所(075・771・3281)へ。

ベートーベンのピアノソナタ

ロマン・ロラン研究所と自然破壊

3

宮本エイ子

昨年「ユニテ」二十八号で、印刷最終校正ぎりぎりのご報告となりましたが、二〇〇一年三月二十九日、開発許可が京都市から出されました。それを受けて、わたしたち住民は、五月二十七日、開発取り消しを求めて審査請求を「開発審査会」へ提出いたしました。

口頭公開審理一回、非公開三、現地検分一回の計五回。書面では、市側の弁明書、住民側の反論書として七回、激しく行き交いました。

取り消し請求を出して八ヶ月後の今年、二〇〇二年一月二十三日、審査会で裁決が下され、住民には二十五日、郵送で結果が知らされました。棄却。遺憾な二字となりました。

審査請求をする他方で、この間、京都太子大学院人間・環境学研究所、都市計画環境保全論の伊徳勉教授のコーディネートによる京都会館での「京都三山と緑地——東山の突端半鐘山をめぐって——」のシンポジウムもしました。その第一部で生物学の偉大な業績を残しておられる岡田節人先生にも「蛙の告げる環境変化——地表の蛙は炭坑のカナリヤか? ——」という左記のような要旨の基調講演もいただきました。

地球上の環境変化に蛙は敏感に反応するか? 蛙は絶滅した第二の恐竜となるか? 蛙をとおして危機きわまる環境変化の警告ではありますが、結論としては、蛙の奇形や消滅は短絡的にはその因果関係突き止められない

い。複合的であり、遺傳的、外的、時間的要因が複雑に絡み合って科学の域を超え、神秘の領域となる。奥深い文化的科学論の印象を受けました。

マスコミに対する「記者会見」という言葉も日常化する程度着し「おばさんをしている」わたしたちには貴重な経験でした。テレビも新聞も特集で取り上げてくれました。(審査請求に対して棄却の裁決が出た後の京都新聞・参照ページ52)

紅葉のシーズン、9/11のテロ後、京都が観光客で溢れているとき、銀閣寺道で二時間、「あの緑の森が壊されるんですよ、救って下さい」の署名活動をして四〇〇人以上の署名が集まりました。

北海道から九州までの人々が、銀閣寺、哲学の道を訪れているのです。京都へ、なぜこれだけの人が来るのか？ 大都会東京にない山に囲まれた盆地に、千年以上の都の歴史があったからです。山がなくなったらもう終わりです。

しかし、山、緑については、開発審査会において一切

カウントされないから不思議です。審査会が判定する(枠を超えている)としているのです。昭和四十三年に出来た開発誘導の「都市計画法」のみが判断の基準だということではありませんか。

わたしたち住民が一縷の望みをかけた裁判に準ずるといわれる(開発審査会)というのは、一体どんな機関なのでしょう？

第三者的機能というものの、京都市長の付属機関です。七名の委員は、法律、経済、都市計画、建築、行政、公衆衛生など学識経験者から京都市長が任命し、事務局は許可を下ろす同じ開発指導課が窓口で、隣に席を構える市役所職員です。審査会は開発許可取り消しの審査をするばかりではなく、許可に当たっても市街化調整区域では、事前に指導する役割も担っているようです。

こうなれば役所が許可を出すことは、場合によっては審査会も同意したことを意味するのですから、それを承知の上で、あえて審査請求に及んだところに、わたしたち住民の苦しい、万一に賭けた切実な思いがあったことを十分ご理解いただけると思います。他方では、裁判

所へ提訴する場合も、審査会を通過しなければ、いきなり司法へは持ち込めない仕組みで、通過点でもあるわけです。

半鐘山弁護団コメント

二〇〇二年一月二十五日

本日、京都市開発審査会から裁決書の交付を受けた。

一 裁決は、まず、入口論（審査請求人適格）で審査請求人二千六十三名のうち、山の開発により崖上、崖下の直近に居住する住民二十九名に加え、開発工事による大型車輛通行により被害を受けるおそれのある住民のうち、百二十四名の審査請求人適格を認めている。これは、まだまだ不十分とは言え、一応評価できるものである。

二 しかしながら、裁決は、その違法性の判断において、その重要な争点である、①接続先道路が延べ五千台に達する工食用車輛により、交通上の支障を来す問題（二号要件）、②山を全面開発して八メートルを超える

擁壁を設置することによる、安全上必要な措置が講ぜられていない点（七号要件）、③業者の「資力、信用」の欠如の問題（十二号要件）について、いずれも形式的な解釈の下に違法性を認めず、かつ、古都保存法や風致地区条例は関係が無いとの消極的解釈に終始している。

これらの点は、形式的にも審査会が、従前と異なり、公開口頭審理を一回しか開催せず、参考人質問も採用しないで、真摯な審理を回避したという不当な対応と軌を一にしており、極めて遺憾である。

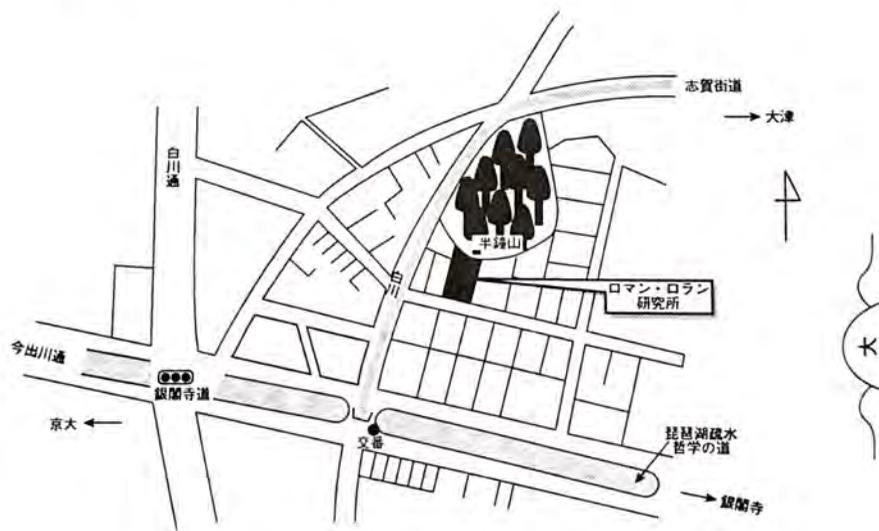
三 他方で、裁決は次の通り、「付言」を付している。開発業者に対しては、「本件土地が世界遺産たる銀閣寺や東山に連なり、京都らしい景観を形成することに寄与しているとすれば、その観点からも権原の主張において周辺との調和を考慮することが望まれるものであったと言えよう。したがって、地域性や土地の形状に応じて周辺住民と利害の調整を図ることを、今後も追求されるよう希望するものである。」とし、京都市長に対しては、「法令上の規制は、これをないがしろ

にすることは許されず、今回の対応もやむを得ないということが出来る半面、景観の保全・生活環境・自然環境の保全等との関連において、古都京都にふさわしい開発のあり方に係るシステムをなおも十分に構築できていないことが、今回の紛争の根底にあると考えられる。」を指摘し、今後の対応として、「一つには、本件について、関係者は、さらに開発者と周辺住民との利害の調整に可能な限り努力すべきである。今一つ、京都市長は、開発者と住民との調整を含む京都にふさわしいシステムを今後研究していくこと」を求めている。

四 「付言」の趣旨からも、京都市長及び開発業者は、一旦、現在の半鐘山開発計画を白紙に戻し、適切な半鐘山の保全と開発のあり方について、協議をすべきであり、これを望むものである。

以上。

採決の出た二〇〇二年一月二十三日から九〇日以内に、京都地方裁判所へ仮処分申請を出す権利が残されているそうです。半鐘山のあるべき姿を求め前進いたします。



住民の住宅計画取り消し求める請求却下

東山連峰の緑園寺山支那にあたる左京区銀閣寺前町の通称「半鐘山」が、開発問題で揺れている。周辺住民は市開発審査会に開発許可の取り消しを求めて審査請求していたが、今月二十五日まで棄却された。半鐘山は歴史的風土保存地などに指定され、展開面などから保全を求める声が強いが、市街化区域として開発可能地域でもある。住民側は行政訴訟も含めた今後の対応を検討するとしており、論争は長引きそうだ。

(社会報道部 藤岡教子)



開発問題に揺れる「半鐘山」
(左の黒山＝左京区銀閣寺前町)

どうなる「半鐘山」

「非常に落胆している。住民の生の声を」と開会の尾西利男副代表が書いてはしかった。「裁決は遺憾」と強調。請求棄却に知り、住民らで作る「半鐘山と北川や市、業者との協議会」を守る急の岡村芳郎代表は語気を強めた。

開発の路が持ち上がったのは一九九八年三月。半鐘山は古都保存法に同地を購入した区内の業者が半鐘山の約三千四百平方メートルを建設する計画の分譲住宅を建設す

現行法では「開発可能」

保全には新たな基準必要

左 京

る、との計画だった。法和市街化区域となつて「大変なことになる。山の前林と地盤を林をすとの要件を満すべし切り崩し、一部宅地は八割を超える高低差を出現させ種々種々、との内容に住民は強く反対した。緑地保全を住民合意を求める請願書が全会一致で採択する。京都市は昨年三月、市環境保全委員の寺田策彦弁護士によると、市街化が同年五月に住民ら約二千四百人が審査請求を行っていたが、棄却された。二十五日に中央区で開かれた記者会見では、同「裁決は遺憾」と強調。問題が年々増える傾向と市が買収をいう。「半鐘山は法や条例、財政負担は例のほさまじき問題。どうするか？」の典型。今の都市計画法は都市化を前提としたもので、環境保護を中心にできる京都三山のうち開発可能地域は約0.2%にすぎないが、面積では約三十七倍に上り、今後同様の問題が生じる。京大大学院人間・環境学研究所の伊達勉教授とが予断を断る。市開発審査会は請求を棄却したが、裁決費の負担、展開や自然環境の有様に頼る部分が多く、保全に関連した古都京都行政はもっと積極的な緑地保全政策を考案すべき」と語り、市街化のことも指摘した。開発が山々へまで進んでいく。開発基準などの議論が再び必要になっていくと、

- | | | | | | |
|-------|------------------|-------|-------|--------------------------|-------|
| 6・4 | ロマン・ロランとベートーヴェン | 青木やよひ | | | |
| 9・27 | ロマン・ロランとデュアメル | 村上 光彦 | | | |
| 10・25 | ロマン・ロランの思想の二面性 | 兵藤正之助 | | | |
| 11・29 | 初めにロマン・ロランあり | 岡田 節人 | | | |
| 6・26 | 〈大洋感情〉と宗教の発端 | 岩田 慶治 | | | |
| 9・25 | ロマン・ロランとイタリア | 戸口 幸策 | | | |
| 10・30 | ロマン・ロランの革命劇をめぐって | 鶴見 俊輔 | | | |
| 11・27 | 宮本正清 没後十年記念追悼会 | | | | |
| | ピアノ演奏…山田 忍 | | | | |
| | 静かにやさしき顔 | 佐々木斐夫 | 12・24 | おはなし「ビエールとリュス」と「また逢う日まで」 | 今江 祥智 |
| | 不思議な静けさ——宮本正清の世界 | 小尾 俊人 | | 映画上映「また逢う日まで」(監督 今井 正) | |
| 一九九二 | 自伝的諸作品について | 佐々木斐夫 | 一九九五 | | |
| 1・29 | | | 1・27 | ロマン・ロランと日本人たち | 小尾 俊人 |
| 一九九三 | | | 6・2 | 私の歩んだフランス文学の道 | 片岡 美智 |
| 1・29 | ロマン・ロランの演劇的世界 | 石田 和男 | 11・10 | ロマン・ロランとR・シュトラウスの周辺 | 岡田 暁生 |
| 5・24 | ガンディーとロマン・ロラン | 山折 哲雄 | | | |
| 6・23 | 『魅せられたる魂』を語る(前) | 重本恵津子 | 一九九六 | | |
| 10・15 | 『魅せられたる魂』を語る(後) | 重本恵津子 | 6・14 | ロマン・ロランとの出会いから | 鄭 承姫 |
| 一九九四 | | | 11・16 | レクチャーコンサート | 岡田 暁生 |
| 1・28 | いま、ロマン・ロランを語る | | | | |

尾埜 善司・今江 祥智

中野 雄

B・デュシャトレ

河野 健二

岡田 節人

岡田 暁生

ピアノ演奏…小坂 圭太

11・18	ベートーヴェン…ピアノソナタ 第21番、28番 ピアノ演奏…北住 淳	11・25	ロマン・ロランと大佛次郎 村上 光彦
11・18	「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロラン 本山 美彦	6・11	ロランと音楽 岡田 暁生
一九九七	「主体的精神と普遍的人間愛」ロマン・ロランと 魯迅 區 建英	10・8	日本ロマン・ロランの友の会五十年記念コンサート 園田 高弘
1・17	わが青春と一生 岩淵龍太郎	12・1	お話と演奏「ピアノとベートーヴェン」 ロマン・ロランとインドの精神 森本 達雄
6・6	ロマン・ロランと結核の時代 福田 真人	二〇〇〇	ロマン・ロラン没後五十五年と日本 佐々木斐夫
9・19	ピアノとチェロのための夕べ ピアノ演奏…北住 淳	10・13	ロマン・ロランと〈老いの豊かさ〉 シンポジウム 青木やよひ 今井 祥智 尾埜 善司
10・4	ロマン・ロラン記念コンサート チェロ演奏…小川剛一郎	二〇〇一	財団法人ロマン・ロラン研究所設立三十年記念コンサート 神谷 郁代
一九九八	ロマン・ロランと種時く人 柏倉 康夫	2・23	神谷 郁代 ベートーヴェンを弾く” ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー デイディエ・シッシュ
6・8	ロマン・ロランと政治的魔術からの解放 柳父 園近	6・23	
9・25	ロマン・ロラン記念コンサート ピアノ演奏…小坂 圭太 レクチャー…岡田 暁生	12・21	
10・30			

財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長 宮本 正清

ロマン・ロラン（一八六六—一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないであります。

しかし、ロマン・ロランの眞の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、眞に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を墮落と頽廃から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研

究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために、喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー

公開講座

●講演会

●読書会・研究会

◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

●ロマン・ロランの著作に感動、また

●彼の周辺の芸術家たちに興味、

●あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感
いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。

●特典①機関誌「ユニテ」の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。

●会員①一般賛助会員は年会費一口五千元。特別賛助会員は年会費十口以上。

二〇〇一年度 賛助会員、寄付者名簿

(アルファベット順・敬称略) *特別会員

青木やよひ 麻生 正超 有馬通志子 礪田ひろみ
 浅井 幸 芦田 友秀 安倍 道子
 シッシュ・D・由紀子 権藤 淳子 五島 清子
 濱田 陽 福田 真人 福井 友栄 福田万紗子
 古家 和雄 *本郷美智子 林 次郎 日野二三代
 北条 文子 池垣 勇 石原 和子
 *稲畑産業株式会社(稲畑 勝雄) 伊藤 朝子
 今江 祥智 井土 熊野 井土 真杉 伊砂 利彦
 乾 昌明 岩坪嘉能子 神谷 郁代 片岡 美智
 梶本 智美 加藤 澄子 河合 一穂 狩野 直禎
 清原 章夫 喜多 寿子 北垣みどり 河田 厚公
 岸田綱太郎 熊木 秀雄 小牧 久時 近藤 正雄
 峯村 泰光 松居 直 宮内 幸子 村山香代子
 前田 和子 前田 政昭 森内富美子 森本 達雄
 森本 博子 宮本エイ子 森久 光雄 村上 光彦
 松井 菊恵 西村七兵衛 西村喜代子 西原久美子
 永田 和子 能田由紀子 西成 勝好 野村 庄吾
 乗金 芳子 小尾 俊人 小田 秀子 折田 忠温

大出 學 大川起示子 奥 和義 尾埜 善司
 大谷 史朗 大谷 綾乃 大谷佳世子 李 珣淑
 *佐々木斐夫 *三友居(山本 勝) 坂谷 千歳
 佐藤 弘 佐久間由紀子 佐久間啓子
 島谷 亜希 志賀 鍊三 下郡 由 杉本千代子
 鈴木 文代 新宮恵美子 田中阿里子 田代 輝子
 田間 千晶 多田 淳子 富田 武 竹本 浩典
 竹下美砂登 谷口けいこ 長 美穂 馬木 紘子
 宇佐見英治 梅原 ふさ 氏家 玲子 植田 滋子
 山下 雅子 吉原 圭子 山本 信子 八木美佐子
 山下 真子 ヴァンチュール・ミシエル
 柳父 閑近

(計 一、〇一九、〇〇〇円)

あとがき

小尾 俊人

人となった存在、それがこの二人です。

昨年は研究所設立三十年記念に音楽会を開きました。神谷郁代先生のオール・ベートーヴェンのピアノ・リサイタル。感動と沈思の、すばらしい夕べでした。シャルル・ベギーの小雑誌「半月手帖」に初めて掲載された罗兰の『ベートーヴェンの生涯』は、日本を含む全世界の二十世紀に、広大な影響を及ぼしました。彼の作品の持つ精神の高み、そのエネルギー、その情感の力は、私たちが鼓舞してやまないのです。私たちが、この営みに参加できたことは、心からの喜びです。御協力下さった皆様に、心からの御礼を申し上げます。

昨年の催しのうち、ディディエ・シッシェ、青木やよひ両先生のお話しの内容を、本号に掲載できましたことは、大きな喜びであります。ユゴーと罗兰、いずれも、同質の世界人であり、一人は十九世紀を代表し、他者は二十世紀を代表しているといえましょう。「人間は尊厳をもって生きねばならない、」それを自身の生き方で証

青木先生は、ロマン・罗兰とともに歩んだほぼ半

世紀、たえず、新鮮な感銘を、罗兰の著作から受ける実感をまざまざと伝えておられます。まさに、古典の読み方、享受の仕方とは、ここに示されたのが典型ではないでしょうか。人は日々に経験する、日に日に新たに生きる。そうすれば、かつての同じ古典が、そのたびに別の本のように新鮮な輝きで、全身的に身体をつつむ。私もこのように、自己を新たにする日々の努力に、つとめたいと思います。

村上光彦先生の連載はいよいよ佳境。最後の部分、とくに罗兰とクローデルの最後の友情の部分。

罗兰「あなたは心情においては私たちと一緒なのです。本能ですよ。血ですよ。」

クローデルは、その言葉を繰り返す。

罗兰はいう「しかし、でもね、わたしの理性は信じているのです。理性とは人間における神的な要素のひとつと、思っていますから、それに執着しているのです。」

クローデルはこの観点に賛成して、旧約の「ソロモン

の箴言」が、理性のもっとも壮麗な贅辞だと、答える。

二人の二十世紀の偉大な文筆家の、記憶すべき一瞬であります。

研究所の裏山の半鐘山開発計画の件は、会員各位の御協力をいただき感謝に堪えません。厚く御礼申し上げます。本号に、弁護団のコメントを載せました。京都市開発審査会の裁決書の要約が出ております。

これを読んで「ロシアと日本が、地球上から消えたら、どんなに住みやすくなることだろう。世界に冠たるこの二つの官僚制。」といった笑い話を思い出しました。

開発審査会なるものは、京都市長の付属機関であり、彼の任命による委員の判断が、第三者機能の役割を果たすというのですが、これでは、問題の客観的判断は期待できません。伝統ある世界の名都・京都の緑地保存が、人類の歴史を実感させ、破壊から守るための、公務員としての公約義務であることが自覚されておりません。またその裁決文の悪文と、そらぞらしさに、日本中にひろがっている役人的行動の無反省のひろがり、その病層の深さを感じます。それにしても、京都の市長が「もっと

も京都市的なもの」についてどうも無智であるとは、あとは第三者判断の道をすすむほかないでしょう。

日本近代文学館へ、「片山敏彦文庫」(ロマン・ロラン関係文献)が献呈収蔵されています。目下整理中ですが、書簡だけはいつでも見られる状況にあります。

(館報三月十二号、安川定男氏寄稿文参照)

皆様のご意見・ご感想をお寄せ下さい！
お待ちいたしております。

ユニテ編集部

小尾 俊人
野村 庄吾
西村 七兵衛
宮本 エイ子

U N I T É

Sommaire

Romain Rolland et Victor Hugo — un point de vue français (traduction: Yukiko Chiche)	Didier Chiche
Lire Romain Rolland à l'automne de la vie	Yayohi Aoki
<i>Au Seuil de la dernière porte: réflexions</i>	Mitsuhiko Murakami
Au terme des réunions du groupe de lecture de <i>L'âme enchantée</i>	Akio Kiyohara
Le professeur Masakiyo Miyamoto: souvenirs	Hideko Oda
L'Institut Romain Rolland et la dégradation de l'environnement (suite)	Eiko Miyamoto
Impressions du concert du 30 ^{ème} anniversaire de la fondation de l'Institut Romain Rolland: <i>jouer Beethoven</i> . (Interprète: Ikuyo Kamiya)	Tamiji Ando
Activités et objectifs de l'Institut Romain Rolland	
Annuaire 2001 des membres et donateurs	
Postface	Toshito Obi

Romain Rolland et Victor Hugo

— un point de vue français —

Didier Chiche

Introduction

Le destin qu'a connu l'œuvre de Romain Rolland est curieux. Prix Nobel en 1915, il a d'abord fait l'objet d'un enthousiasme universel: traduit en beaucoup de langues, vendu à plusieurs millions d'exemplaires, par exemple en Russie, et ayant joui, en France même, d'un indéniable succès populaire (*Jean-Christophe*, bien sûr, mais aussi *Colas Breugnon* ou *L'âme enchantée*, ont été, en leur temps, de grands succès de librairie), cet auteur a rapidement été victime d'une désaffection, d'abord progressive, puis qui s'est accélérée. Le résultat, c'est qu'aujourd'hui, on ne trouve presque plus aucun ouvrage de R. Rolland en librairie. Tout ce qu'on trouve de lui, c'est sous forme de morceaux choisis, dans des ouvrages ayant trait à des écrivains ou à des événements historiques ayant, un jour ou l'autre, intéressé R. Rolland: ses écrits sont cités à titre d'illustration, et jamais pour eux-mêmes.

Il faut dire que cette désaffection avait commencé dans les années 40-50. Elle a d'abord été le fait d'intellectuels qui lui ont reproché — j'y reviendrai — d'écrire mal. Mais cette explication est insuffisante. Et si j'ai intitulé cet exposé: *Romain Rolland et Victor Hugo*, c'est que je crois le parallèle entre les deux — que Rolland n'aurait au demeurant pas désavoué — susceptible de fournir des éléments de réponse à cette question.

On sait en effet l'estime que Rolland a toujours eue pour Hugo: l'homme aussi bien que l'œuvre. Rolland raconte comment, jeune, il avait vu Hugo en Suisse. Ce dernier fit à Rolland l'impression d'une sorte de

vieux prophète qui, à la foule réunie et criant: *Vive Victor Hugo!* imposa le silence avant d'ajouter: *Vive la République!* De plus, on sait qu'au début de sa carrière de professeur, Rolland, chargé, pour des raisons alimentaires, d'un cours de morale à l'école Jean-Baptiste Say, — une morale officielle, aussi hypocrite et ennuyeuse que celle de l'Église — ne parvenait à tirer ses élèves de la torpeur et de l'ennui qu'en leur lisant des pages des *Misérables*.

Bref, pour le jeune Romain Rolland comme pour tout écrivain débutant dans les dernières années du siècle, Hugo — on dit: *le père Hugo* — est une figure tutélaire qui résume un peu le siècle, aussi bien par la variété de son inspiration que par la richesse de son œuvre. De plus, c'est la figure qui symbolise les valeurs républicaines. Les funérailles de Hugo, en 1885, ont été, à ce titre, la manifestation d'une sorte de religion civile, de culte d'un poète qui est le poète de la France et le poète de la République.

Être écrivain, c'est donc, automatiquement, se situer par rapport à Hugo: c'est recueillir, à travers l'œuvre hugolienne, l'héritage du XIXème siècle.

Rolland et le XIXème siècle.

Car si Rolland est hugolien, c'est d'abord qu'il est, par sa naissance bien sûr, mais aussi par tous ses choix idéologiques, fils du XIXème siècle.

Il y a en effet un *credo*, un certain nombre d'habitudes de pensée propres aux intellectuels de gauche du XIXème siècle, et que Rolland a prolongées. Ces idées, auxquelles l'œuvre de Hugo avait donné un écho particulièrement retentissant, peuvent être schématisées comme suit:

- Choix d'une posture qui est celle de l'intellectuel de gauche;
- confiance dans le peuple, et dans sa capacité à construire un

avenir radieux;

- foi en l'avènement d'une République universelle;
- anticléricalisme, mais aussi:
- lamentations sur les progrès du matérialisme;
- fascination pour l'Allemagne, qui n'est pas, par nature ennemie de la France, mais qui au contraire doit constituer avec elle le socle d'une Europe unie.

Deux écrivains de gauche

Et d'abord, Rolland comme Hugo sont, on le sait, des intellectuels (de gauche). Deux mots importants, et sur le sens desquels j'aimerais revenir.

Intellectuels, d'abord. L'intellectuel — à la française du moins —, c'est celui qui se mêle de ce qui ne le regarde pas: l'artiste, ou l'écrivain, qui, sortant du culte exclusif de son art, se risque à prendre parti, à défendre une cause, à dénoncer une injustice — fût-ce, au besoin, *contre* le milieu auquel il appartient: Hugo dénonçant les pesanteurs et les hypocrisies de la société louis-philipparde alors qu'il est lui-même pair de France; Rolland qui, dès sa prime jeunesse, rompt avec le catholicisme étouffant dans lequel il est né.

Car l'intellectuel, c'est, comme dit Valéry — citant le *Faust* de Goethe — «l'esprit qui toujours nie»: qui nie, non seulement les convictions de son milieu d'origine, mais aussi les excès de ses compagnons de lutte. Hugo s'inscrit en faux contre le matérialisme de ses amis républicains de gauche, et dénonce, dès la Révolution de 1848, les excès auxquels peut conduire cette terrible religion sans dieu que risque de devenir le socialisme naissant. Rolland qui, dans sa jeunesse, au moment de l'affaire Dreyfus, se retrouve naturellement dans le camp des dreyfusards, réproouve ceux qui *se servent* de cette noble cause par souci

de carriérisme au lieu de se contenter de la servir: ceux qui, pour reprendre les termes de Charles Péguy, ami de jeunesse et compagnon de lutte de Rolland, transforment la *mystique* en *politique*. Plus tard, ayant placé ses espoirs dans la révolution bolchevique, Rolland n'en écrira pas moins, en 1927 (À E. Reynier): «Sur le bolchevisme, je n'ai point varié. Porteur de hautes idées, (...) le bolchevisme les a ruinées par son sectarisme étroit, son inepte intransigeance et son culte de la violence. Il a engendré le fascisme, qui est un bolchevisme à rebours.» Bref, engagé, oui, mais toujours ailleurs, et ce au nom d'une exigence éthique supérieure. C'est la fameuse formule de Victor Hugo: «Je suis un homme qui pense à autre chose». Il faut s'engager, mais ne pas se laisser asservir par cet engagement. L'intellectuel, fût-il un militant, conserve toujours son indépendance d'esprit.

Cela dit, Rolland aussi bien que Hugo sont très proches l'un de l'autre par le contenu qu'ils donnent à leur engagement. Tous deux pensent que demain doit être plus beau qu'aujourd'hui: que le progrès social et politique est possible, que l'on peut marcher vers l'avènement d'une cité de justice, et que tous les efforts doivent être accomplis pour hâter cet avènement. Dans cette cité, les classes sociales auront disparu, se seront fondues dans le culte universel de la vérité et de la justice (ce qui est évidemment aux antipodes du dogme marxiste de la dictature du prolétariat). «Avec le prolétariat, toutes les fois qu'il respectera la vérité et l'humanité. Contre le prolétariat, toutes les fois qu'il violera la vérité et l'humanité. Point de classes privilégiées — ni d'en haut, ni d'en bas — en face des valeurs humaines!» (*Humanité*, 12 mars 1922)

C'est en somme une sorte de volontarisme confiant, mais critique. Car, comme il est dit dans *Clérambault*, la fin ne justifie pas les moyens. «Les moyens sont encore plus importants au vrai progrès que la fin.»

Cet engagement critique permet de voir que Chez Rolland comme

chez Hugo, la vision de la Révolution française est très similaire.

Il y a un grand roman historique de Hugo sur la Révolution: *Quatre-vingt-treize*. Et ce roman a inspiré aussi bien le *Théâtre de la Révolution* que l'attitude de Rolland face à la Révolution russe.

Dans *Quatre-vingt-treize*, la Révolution apparaît comme quelque chose qu'il faut accepter ou refuser en bloc. On ne peut pas opérer de sélection. Dans un chapitre célèbre de ce roman (II, 2, 2), qui met en scène un dialogue assez orageux entre Marat, Danton et Robespierre, ce qui apparaît, au delà de la confrontation des points de vue, c'est la complémentarité de ces trois figures — qui pourtant en sont presque à se haïr, tant sont importantes leurs divergences sur les menaces qui compromettent la réussite du projet révolutionnaire. (« ... à nous trois, dit Marat, nous représentons la Révolution. Nous sommes les trois têtes de Cerbère. De ces trois têtes, l'une parle, c'est vous Robespierre; l'autre rugit, c'est vous Danton ... — L'autre mord, dit Danton, c'est vous, Marat. — Toutes trois mordent, dit Robespierre. ») La Révolution est un bloc, et il faut tout accepter d'elle, ou la renier totalement: cette idée aura cours sous la III^{ème} République et persiste aujourd'hui.

Rolland ne pense pas autrement, et la choix de la forme théâtrale lui permet d'assumer ce parti pris, puisqu'il peut ainsi mettre en scène la Révolution dans sa diversité et dans son unité: opposer Danton, qui veut que soit mis un terme à la terreur, à Robespierre, qui soupçonne tout le monde et dit (*Danton*, II, 3): « Je me défie de tous les hommes ... J'arracherai les masques... » Or Danton, comme Robespierre, ont été, dans leur complémentarité et jusque dans leur opposition, nécessaires à l'accomplissement de la Révolution. Ce qui permet de comprendre pourquoi, en janvier, 1919, Rolland écrivait à Seippel: « Quant à désavouer la Révolution russe, n'y comptez pas, cher ami, avant que vous ayez désavoué la Révolution française (...). Si je vous rappelle (...) les massacres de septembre, les assassins de la princesse de

Lamballe, le juges infâmes de Marie-Antoinette, (...) vous me répondrez justement qu'ils ne représentent pas l'œuvre de la Convention, et surtout son idéal.) En somme, on voit la difficulté d'une attitude consistant à soutenir la Révolution — qu'elle soit française ou bolchevique —, sans fermer les yeux sur ses crimes: comme disait Hugo, nous haïssons le despotisme de Robespierre, mais nous reconnaissons son efficacité, à savoir: (le résultat accompli: le vieux monde sabordé et coulé à fond.) L'on comprend dès lors, que la forme théâtrale, parce qu'elle est dialoguée et n'oblige pas à conclure, ait été la plus apte, pour Rolland, à manifester ce point de vue: celui d'une approbation d'ensemble, mais jamais aveugle — à la suite de Hugo, dont le chapitre évoqué tout à l'heure avait tout du dialogue dramatique.

La Révolution est une source d'inspiration privilégiée: à la suite de Hugo, il s'agit de magnifier ce moment de notre histoire nationale. Dans sa *Préface à mon théâtre*, Rolland écrivait déjà en 1892: (Surtout, explorer la (Légende de la Révolution), qui est devenu le véritable fond de l'âme nationale, au détriment de l'ancienne histoire française, fort oubliée, peu populaire, à quelques épisodes près). Comme Hugo, pas seulement dans son œuvre romanesque mais aussi dans son œuvre poétique, Rolland est sensible à la grandeur épique de la Révolution, et au pouvoir mythologique de cette période. En cela, Rolland est en accord avec l'esprit de la III^{ème} République, qui a cherché à créer des mythes fondateurs, notamment en magnifiant les figures des grands révolutionnaires — en particulier Danton. Il faut écrire l'épopée, mais en gardant toute sa liberté de jugement.

La déploration du matérialisme.

Intellectuel de gauche, donc, mais étranger au matérialisme. Bien sûr, le combat d'un intellectuel de gauche est, au XIX^{ème} siècle, un

combat anticlérical: c'est-à-dire une opposition radicale à l'Église catholique dans sa prétention à régenter les esprits — par l'enseignement — et à régenter la société: c'est un combat pour la laïcité — celle de l'École, celle de l'État — et dans ce combat, Rolland se retrouvait côte à côte avec ceux qui avaient pris fait et cause pour Dreyfus. De plus, nous savons que dès son adolescence, Rolland avait perdu la foi, et rompu avec le catholicisme familial. (Ma rupture avec le catholicisme, écrira-t-il vers 1925 dans *Le Voyage intérieur*, fit saigner le cœur de ma mère.)

Toutefois, Rolland n'a jamais été un militant du matérialisme athée: il y a toujours eu chez lui un besoin de spiritualité, de transcendance, de religiosité diffuse. Toujours dans *Le Voyage intérieur*: (Mon premier acte d'énergie (...) fut de rompre avec ma religion. *Ce fut mon acte le plus religieux.* (...) Dieu ! Je suis franc avec toi ! Je ne vais plus à ta messe. (...) Je ne crois pas en toi. *«réponse de Dieu:»* — Ne pas croire, c'est encore croire ! Tu ne me nierais point, si nous n'étions aux prises...). Donc, la renonciation à une religion socialement établie (le catholicisme) ne signifie pas du tout que Rolland ait tiré un trait sur toute vie spirituelle. Au contraire, dans le même texte, il décrit l'émerveillement qui l'a saisi en découvrant le panthéisme de Spinoza; notamment le texte de Spinoza qui évoque *l'Être unique, infini, l'être qui est tout l'être, et hors duquel il n'y a rien.* (Tout ce qui est, est en Dieu.) Et moi aussi, je suis en Dieu.) On voit que Rolland est très loin du matérialisme. Et d'ailleurs, dans une lettre de mars 1909, adressée à Louise Cruppi, il critique la faiblesse de la pensée laïque, qui repose sur un bon sens terre-à-terre, et nie les droits de toute spiritualité. Claudel, avec qui Rolland resserrera ses liens à la fin de sa vie, verra en Rolland une âme essentiellement religieuse. Et c'est d'ailleurs pourquoi, dès 1898, un ami catholique lui écrivait: (J'ai presque honte d'être chrétien quand je cause avec vous: parce que je vous sens tellement plus digne que moi du nom et de la mission d'un

chrétien.)

Penseur de gauche, donc, mais animé d'un puissant besoin de croire, exactement comme Hugo, qui, lui, n'avait jamais été catholique — il n'avait même pas été baptisé — mais qui se déclarait *pour la Religion, contre les religions. Contre les religions*, c'est-à-dire contre les cultes établis et mis au service d'un certain ordre social, comme le *catholicisme sociologique* du XIX^{ème} siècle (et l'on sait que Hugo a été, dans ses prises de position politiques, un farouche adversaire du parti catholique); *pour la Religion*, c'est-à-dire pour maintenir cette dimension essentielle de la vie humaine: le besoin de croire. Hugo a toujours été un *croyant*, persuadé que le monde a un sens, que le monde a une âme à laquelle nous participons, et que « tout dit dans l'infini quelque chose à quelqu'un. » (*Les Contemplations*)

« Debout, mais incliné du côté du mystère » (*Les Contemplations*): cette manière que Victor Hugo a de caractériser son attitude n'est-elle pas très exactement applicable à celle de Romain Rolland ?

C'est pourquoi on trouve, chez l'un comme chez l'autre, une déploration du matérialisme triomphant, qui envahit la civilisation moderne. Dans un poème écrit en 1840, mais repris dans un recueil tardif (*Toute la Lyre*) et intitulé *Les deux côtés de l'horizon*, Hugo déplorait amèrement ce passage d'une civilisation à une autre:

L'Amérique surgit, et Rome meurt! ta Rome!
Crains-tu pas d'effacer, Seigneur, notre chemin,
Et de dénaturer le fond même de l'homme,
En déplaçant ainsi tout le génie humain?

Donc, la matière prend le monde à la pensée!
L'Italie était l'art, la foi, le cœur, le feu.
L'Amérique est sans âme. Ouvrière glacée,

Elle a l'homme pour but. L'Italie avait Dieu.

Un astre ardent se couche, un astre froid se lève.
Seigneur! Philadelphie, un comptoir de marchands,
Va remplacer la ville où Michel-Ange rêve,
Où Jésus met sa croix, où Flaccus mit ses chants!

C'est ton secret, Seigneur. Mais, ô Raison profonde,
Pourras-tu, sans livrer l'âme humaine au sommeil,
Et sans diminuer la lumière du monde,
Nous donner cette lune au lieu de ce soleil?}

Texte un peu long mais très important. Il ne s'agit pas de voir là un quelconque *«anti-américanisme»* — puisque ici, l'Amérique n'est rien d'autre qu'un symbole-, mais ce poème dit bien l'angoisse de Hugo devant une *«crise de civilisation»*. Cette crise, Rolland l'a lui aussi parfaitement perçue et il en parle dès 1903, dans l'introduction à sa *Vie de Beethoven*, lorsqu'il évoque ce *«matérialisme sans grandeur»* qui, selon lui, écrase *«la vieille Europe»*. De là ce rêve d'une renaissance européenne, qui parcourt toute son œuvre — comme elle parcourait celle de Victor Hugo.

Deux écrivains européens

En effet, s'il est banal de dire que Rolland a été, à la suite de Victor Hugo, un grand européen, il faut bien voir que la renaissance de l'Europe, qu'il appelle de tous ses vœux, est d'abord une renaissance spirituelle. Dans un monde qui sombre dans le matérialisme, il faut la présence de l'Europe comme culture et comme force spirituelle, pour contrer ce matérialisme et établir un dialogue fécond avec l'Asie. En ce

sens, le projet européen — chez Rolland comme chez Hugo — est un projet moins politique que culturel. Il ne s'agit pas de créer un super-État, mais de créer un espace intellectuel: «Il faut, écrit Rolland en 1901 (*Chère Sofia*), une patrie intellectuelle et morale où se crée enfin l'âme européenne.» C'est pourquoi toute guerre entre des nations européennes est une guerre civile: «Quel que soit le vainqueur dans une guerre, le premier, l'irréremédiablement vaincu sera tout l'Occident.» (*Chère Sofia*, 6 septembre 1911). Car l'Europe comme patrie commune à tous les esprits qui l'habitent est déjà une réalité, même si on l'ignore: et c'est bien sûr cette grande idée qui anime *Au-dessus de la mêlée*.

L'Europe comme patrie culturelle, la nationalité européenne: thème hugolien par excellence. «... il y a aujourd'hui une nationalité européenne, comme il y avait du temps d'Eschyle, de Sophocle et d'Euripide une nationalité grecque. Le groupe entier de la civilisation, quel qu'il fût et quel qu'il soit, a toujours été la grande patrie du poète. Pour Eschyle, c'était la Grèce; pour Virgile, c'était le monde romain; pour nous, c'est l'Europe.» (*Les Burgraves*, Préface) Cette Europe dont l'union préfigurera, nous dit ailleurs Hugo, les États-Unis du monde, — ces *États-Unis de l'humanité*, dira Rolland en 1928, dans un texte consacré à l'Inde: *Vie de Vivekananda*. En 1916, André Gide, dans son *Journal*, se disait étonné de la facilité avec laquelle Rolland avait choisi de faire de Christophe un allemand. Il y voyait la marque du «germanisme de ses goûts, de ses tendances, de ses réactions, de ses volontés» — à un moment (1916!) où un Français affichant son admiration de l'Allemagne pouvait aisément se faire taxer de trahison. En fait, plutôt que de germanisme, il faut supposer que Rolland a redécouvert cette tendance profonde du romantisme, telle qu'elle se marque chez Hugo en particulier: la fascination de l'Allemagne. Dans *Au-dessus de la mêlée*, Rolland s'adresse aux Allemands: «Mes amis allemands (...) vous savez combien j'aime votre vieille Allemagne (...) Je suis fils de Beethoven, de

Leibniz, et de Goethe, au moins autant que vous...) Cette admiration pour une grande civilisation, quelles que soient les contingences du moment, c'est exactement l'attitude de Victor Hugo, qui, dans un grand récit de voyage: *Le Rhin*, disait, en 1842, que s'il n'était français, il voudrait être allemand, et déclarait: «L'Allemagne et la France sont essentiellement la civilisation. L'Allemagne sent; La France pense. Le sentiment et la pensée, c'est tout l'homme civilisé. (Français et Allemands) ... sont frères dans le passé, frères dans le présent, frères dans l'avenir.» Et dans un texte plus tardif, *William Shakespeare* (1864), et qui en fait n'est pas simplement consacré au dramaturge anglais, Hugo passe en revue les génies de l'histoire humaine. Il redit son admiration pour la richesse et la diversité de la civilisation allemande («L'Allemagne a tout en elle et tous chez elle»), et ajoute que le langage qui exprime le mieux le génie allemand, dans sa profondeur qui se dérobe à l'analyse rationnelle, c'est la musique: «La musique est le verbe de l'Allemagne.» Voilà pourquoi «le grand allemand, c'est Beethoven.» Beethoven auquel, soit dit en passant, Rolland a consacré un ouvrage. C'est dans la musique que l'Allemagne trouve le moyen par excellence de communiquer avec l'humanité.

Il n'est pas exagéré de dire qu'ainsi, Hugo annonce le *Jean-Christophe*. Dans ce roman de la vieille Europe que menace la guerre, ce n'est pas un hasard si le meilleur interprète de Roland est un Allemand, et de surcroît un musicien: ce langage universel qu'est la musique lui permet ainsi d'en appeler à l'union des peuples, au-delà des antagonismes gouvernementaux: des peuples qu'il connaît, et dont il sait qu'ils peuvent travailler ensemble au progrès du genre humain. Entre les peuples français et allemand, le Rhin, comme dans le texte de Victor Hugo qui porte le même nom, peut servir de trait d'union: «Son destin dit Rolland en parlant de Christophe, (...) était de charrier, comme une artère, dans les peuples ennemis, toutes les forces de la vie de l'une et

l'autre rive.) (J. C. 1077) Sur les deux rives du Rhin, il y a des forces de vie, qui, au lieu de se déchirer, peuvent opérer ensemble.

Conclusion: un écrivain vieilli ?

Écrivains de gauche, mais d'une gauche idéaliste et inspirée, écrivains européens : voilà donc ce qu'ont été Hugo et Rolland. Les grands thèmes que Roland a développés viennent tout droit de l'idéalisme républicain du XIX^{ème} siècle. Mais Hugo, par l'éclat de sa parole et la richesse de son inspiration, les a traités avec un tel brio que Rolland n'a pas pu ne pas être influencé par lui.

Cela permet de comprendre le destin qu'a connu l'œuvre de Rolland — en particulier le discrédit qu'elle a subi, après avoir été tant admirée. On sait en effet qu'après sa mort, Hugo a connu une assez longue période de purgatoire, qui a duré plusieurs dizaines d'années. À une époque où être de gauche, c'était être matérialiste et athée, on reprochait à Hugo son idéalisme généreux et empreint de la croyance en Dieu, en l'âme, et plein de bons sentiments. Déjà, du vivant de Hugo, ce reproche avait commencé: Zola, par exemple, ne comprenait pas l'habitude qu'avait Hugo de prier sans cesse. Et si Hugo est finalement sorti du purgatoire, c'est qu'on a reconnu que le penseur idéaliste n'était pas un idéologue, mais d'abord un grand manieur de mots, un grand poète, qui a renouvelé le langage, et qui est au point de départ de toute la modernité poétique.

Rolland, lui, a suivi Hugo au purgatoire. On lui a reproché, on lui reproche encore, d'être un romantique attardé, généreux mais incapable de réalisme: un héritier de l'idéalisme tel qu'il avait cours dans la génération des grands romantiques (Hugo, d'abord et par excellence, mais aussi Michelet ou George Sand).

On lui a reproché aussi, plus tard, d'avoir soutenu des causes et des

actions politiques indéfendables (on sait en effet que Rolland fut l'un des plus vigoureux soutiens de l'Union Soviétique). Pourtant, il n'a pas été le seul intellectuel français à se tromper: Éluard, Aragon, ont eux aussi donné dans cet aveuglement.

Le problème, c'est que chez Rolland, on a vu surtout l'idéologue, mais presque pas l'écrivain. Un écrivain dont on se complait à souligner les naïvetés d'expression, les maladresses ou les platitudes stylistiques. Son style, même dans *Jean-Christophe*, est rempli de clichés, de choses qui n'ajoutent rien à l'expressivité. C'est vrai que ce n'est pas un styliste, et que, dans son désir de faire une littérature populaire, grand public, il cherche avant tout à être compréhensible. S'adressant à lui-même, il dit, dans l'*Introduction à Jean-Christophe*: «Parle droit! (...) Parle pour être compris! Compris, non pas d'un groupe de délicats, mais par les milliers, par les plus humbles! Et ne crains jamais d'être *trop* compris! Parle sans ombres et sans voiles, clair et ferme, au besoin, lourd!» Au temps de Proust et de Gide, écrire cela, c'est évidemment avoir une conception très simpliste du langage littéraire. C'est renoncer à être ce qu'avait d'abord été Hugo: un grand forgeron du verbe. En somme, pour reprendre la terminologie de Barthes, on perçoit Rolland, comme un *écrivain* plus que comme un *écrivain*. De plus, ces grandes fresques à la fois romancées et historiques, comme *L'âme enchantée* ou *Jean-Christophe*, apparaissaient déjà, du vivant de Rolland, comme des formes littéraires dépassées. Trop souvent, on a l'impression d'une série de dossiers ou de thèmes plaqués artificiellement sur un canevas narratif, sans que les personnages mis successivement en scène pour traiter ces thèmes aient le temps de prendre une véritable consistance.

L'héritier un peu naïf d'un idéalisme en grande partie hugolien, mais qui n'aurait pas eu les moyens littéraires de son ambition: tel apparaît donc Rolland. S'il doit un jour sortir du purgatoire, c'est comme créateur, comme poète au sens large du terme. Ce n'est d'ailleurs pas un

hasard si l'œuvre de Rolland qu'on lit encore le plus, c'est *Colas Breugnon*. Dans ce texte, il y a non seulement de l'humour, mais aussi de réels bonheurs d'écriture, des trouvailles d'expression qui tranchent par rapport aux autres œuvres. *Colas Breugnon* fait cependant figure d'œuvre isolée... Qu'en est-il des autres textes? Ne peut-on pas y voir autre chose que des témoignages historiques, ou que de grandes fresques relevant d'une conception un peu naïve et dépassée de la littérature? Il faut dire que Rolland lui-même, par l'affirmation de ses choix (lisibilité, littérature grand public) ne nous aide guère... Pourtant, s'il faut à mon sens attendre quelque chose de la recherche à venir, c'est bien ceci: qu'elle nous révèle que Romain Rolland, ce grand intellectuel engagé, ce grand témoin de son époque, à été aussi un authentique écrivain.

Notre époque est ironique. Chez Rolland, la sincérité d'intention exclut a priori l'ironie ou la distanciation. Mais telle qu'elle est, l'œuvre de ce grand intellectuel ne mérite pas le discrédit qui semble la frapper aujourd'hui. Entre le siècle de Victor Hugo et celui de Sartre, cette œuvre est un maillon utile, et d'un indéniable intérêt intellectuel.

Ce texte est une conférence donnée le 21 décembre 2001 à l'Institut

Franco-Japonais du Kansai dans le cadre des activités de l'Institut Romain Rolland.

ユニテ 第二十九号

発行日 二〇〇二年四月二十日

発行者 (財) ロマン・ロラン研究所

理事長 尾 埜 善 司

京都市左京区銀閣寺前町三三二

電話・FAX

(〇七五) 七七一―三二八―

郵便番号 六〇六―八四〇七

郵便振替振込口座番号

〇一〇五〇―九一五九九九六

印刷所 (株) 北斗プリント社

URL <http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/>
E-mail rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp